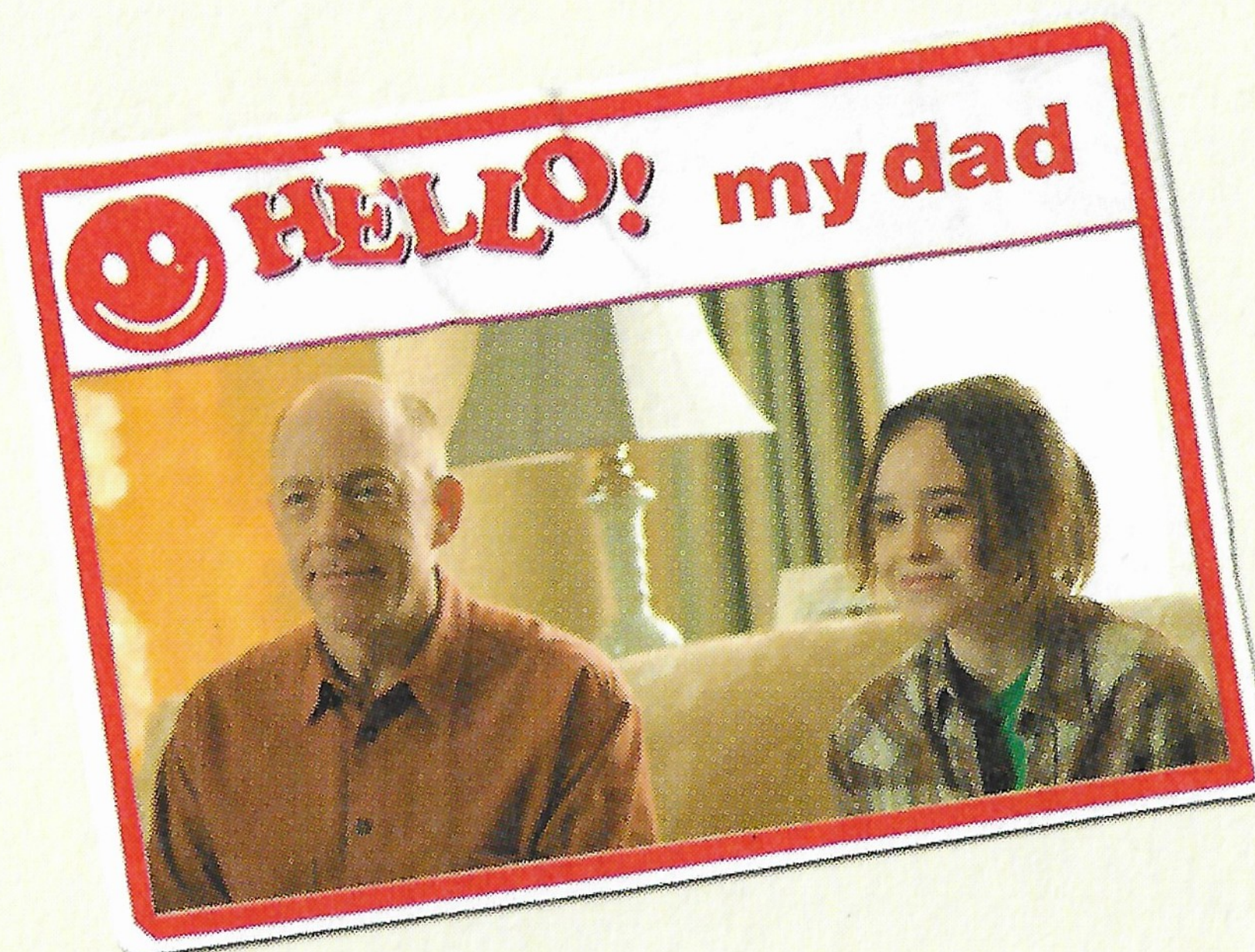
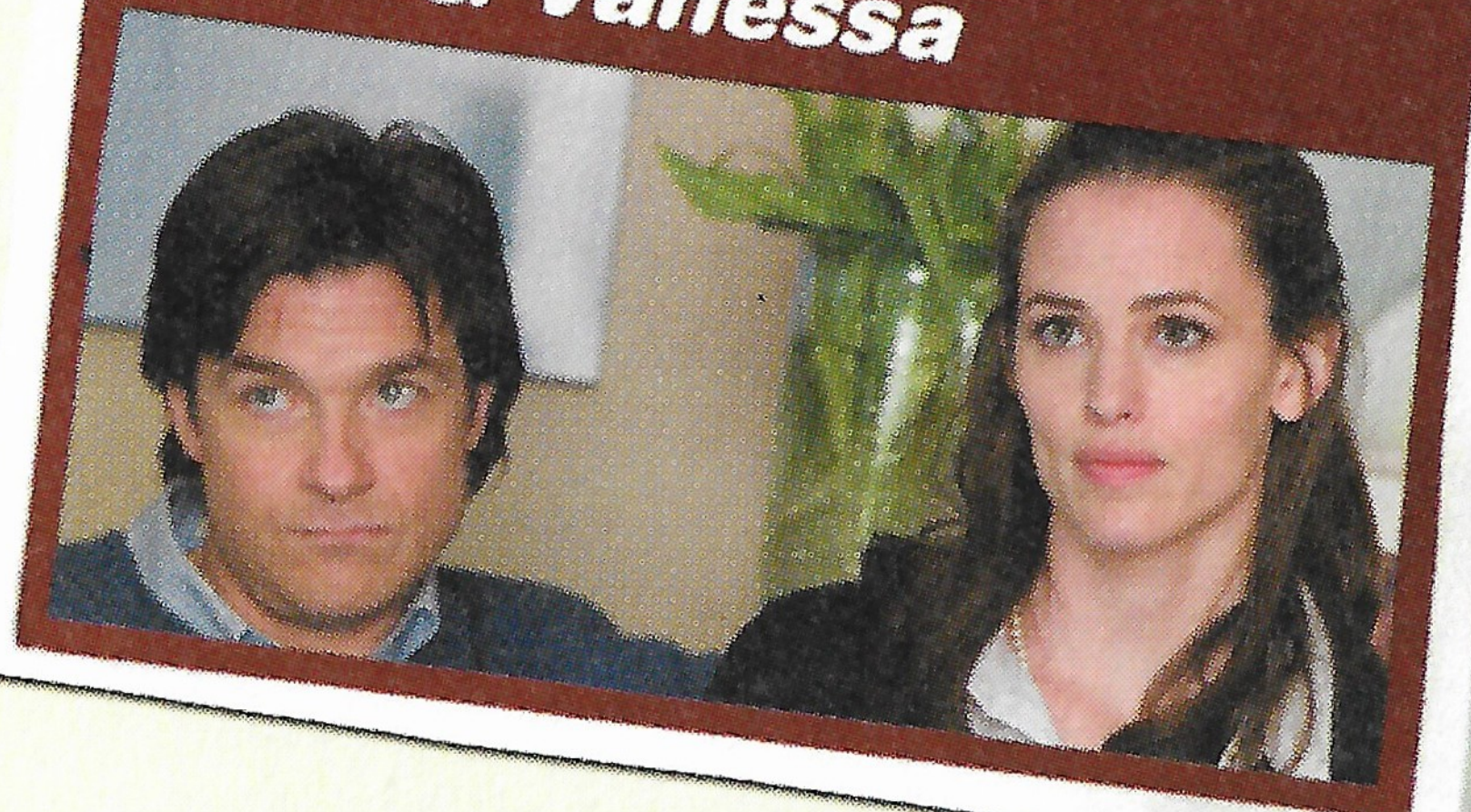


Chanter Ciné

Mark & Vanessa



A comedy about growing up
...and the bumps along the way.

my best friend Leah, my stepmom, Bren



JUNO ジュノ

A Jason Reitman Film





……始まりは椅子だった



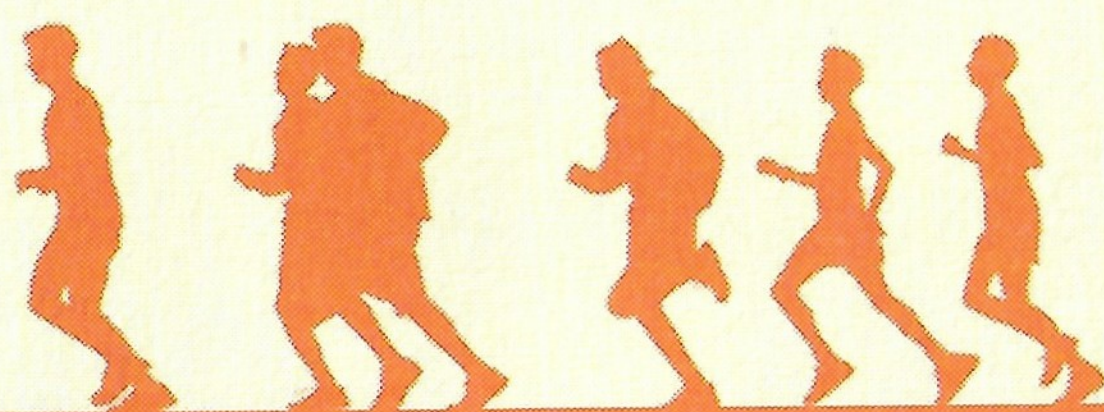
Introduction

本年度アカデミー賞 最優秀脚本賞受賞! 主要4部門ノミネート! (作品・監督・主演女優・脚本)

第80回アカデミー賞に奇跡が起きた!! 名だたるキャストが出演しているわけでもなく、監督は弱冠30歳で長編2作目、脚本家に至ってはこれがデビュー作という不利な条件ばかりの『JUNO／ジュノ』が、作品賞、監督賞、主演女優賞、脚本賞の主要4部門にノミネートされたのだ。まさに奇跡としか表現できない快進撃! 『JUNO／ジュノ』旋風がついに日本に上陸する。

2007年ローマ国際映画祭最優秀作品賞(グランプリ)やトロント国際映画祭観客賞受賞と、『JUNO／ジュノ』は世界各地の映画祭で高い評価を受けていた。しかし、誰も予想していなかった快進撃が始まる。ブロッカー出身の新人脚本家ディアブロ・コディによる新鮮でリアリティあるセリフや、ヒロインが乗り移ったかのようなエレン・ペイジの熱演、『サンキュー・スモーキング』

で見たひねりのある笑いを継承するジェイソン・ライトマン監督の演出が三位一体となり、観客の口コミで大爆発。一挙に全米約2000館以上に拡大し、『アイ・アム・レジェンド』『ナショナル・トレジャー／リンカーン暗殺者の日記』などがひしめく激戦のクリスマスシーズンで、居並ぶ大作を蹴散らして着実に順位を上げ、最高位2位を獲得! わずか2カ月で興行収入が1億ドルを超え、さらに全世界で公開されて2億ドルを超える大ヒット作に成長したのだ。サウンドトラックもiTunesストア・アメリカで、レディオヘッドの新譜を抑えてダウンロード1位を獲得、全米ビルボード・チャート1位(2008年2月9日付ビルボード200)と、映画界でも音楽界でも『JUNO／ジュノ』旋風が吹き荒れている。



Story 1

16歳のジュノ(エレン・ペイジ)は父マック(J.K.シモンズ)、義母のブレン(アリソン・ジャネイ)、妹リバティ・ベルの4人家族。

ある日、ジュノはこれまでの人生で思ってもみなかったトラブルに遭遇する。トラブルの元は、友だちのポーリー・ブリーカー(マイケル・セラ)との椅子の上でのセックス。まさかと思いつつ、妊娠検査薬を試してみると、結果はピンクのプラス。一瞬だけ自殺を考えつくも実行はできず、ポーリーに妊娠を報告する。戸惑うポーリーを前にジュノは中絶を提案するのだった。

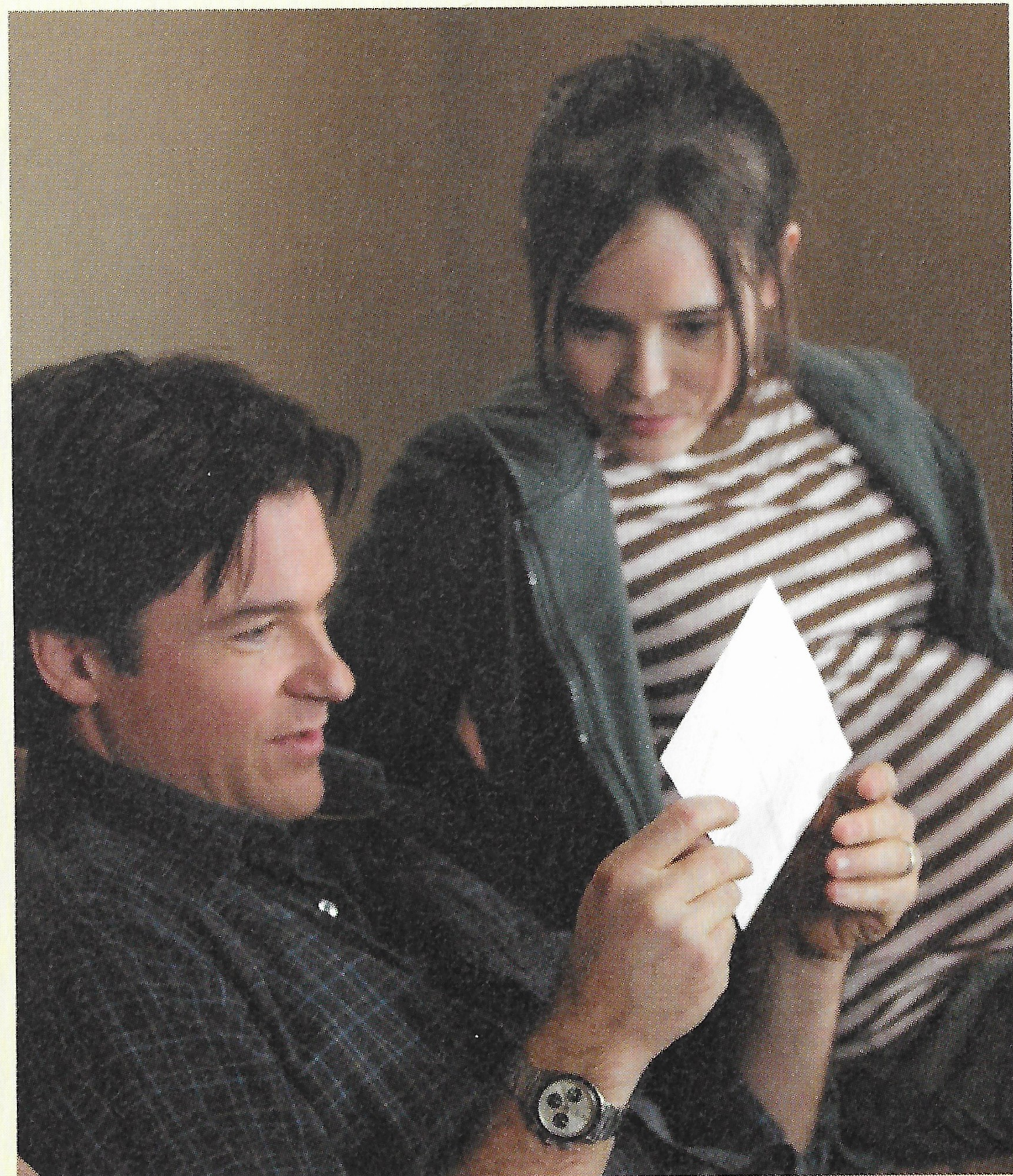
しかし、後日向かったクリニックの前に、中絶反対運動中の同級生がいて……「赤ちゃん、おびえてるわ。痛みも感じるし、ツメも生えてるのよ」。ジュノは考えを翻した。

ジュノは親友のリア(オリヴィア・サルビー)に相談してタウン情報誌で養子縁組を望むカップルを探し出し、そのうえで

両親にも妊娠を報告する。初めは10代の娘の妊娠に衝撃を受ける父だったが、子供を出産し、その子を養子に出すというジュノの意見を尊重してくれた。

父と共にジュノは彼女の思う“理想的なカップル”、高級住宅地に住み、仕事を持ちながら何でも完璧にこなす美人のヴァネッサ(ジェニファー・ガーナー)と夫のマーク(ジェイソン・ベイトマン)のローリング夫妻の家を訪れる。ふとトイレに立ったジュノは、大好きなギターのある部屋を見つける。ジュノは77年をロックの黄金期だと考えるパンク大好き少女。そして思いがけなく、マークが——93年をロックの黄金期だと思っているにせよ——音楽好きだとわかり、ジュノはマークには打ち解けた気持ちを抱くのだった。





季節は過ぎて、冬。日を追うごとに、ジュノのお腹はどんどん膨らんでいく。学校でも彼女の妊娠の噂は広がっていたが、ポーリーは今までと変わらない態度でジュノに接していた。義母のブレンとリアと一緒に超音波検査へ行くジュノ。検査技師の女性がつぶやいた「10代の母親の家庭環境は赤ちゃんを育てるには劣悪」という言葉に憤慨したジュノだったが、傍らにいたブレンはこう言い放った。「胎児の画像を出せると偉いわね? もう少し頭を使う仕事を学んだら?」

検査でもらった超音波の写真を少しでも早くヴァネッサとマークに見せたくて、ジュノは連絡せずに夫妻の家を訪ねる。家にはマークが一人でいた。実はマークはCMの作曲家で、いつも家で仕事をしているという。

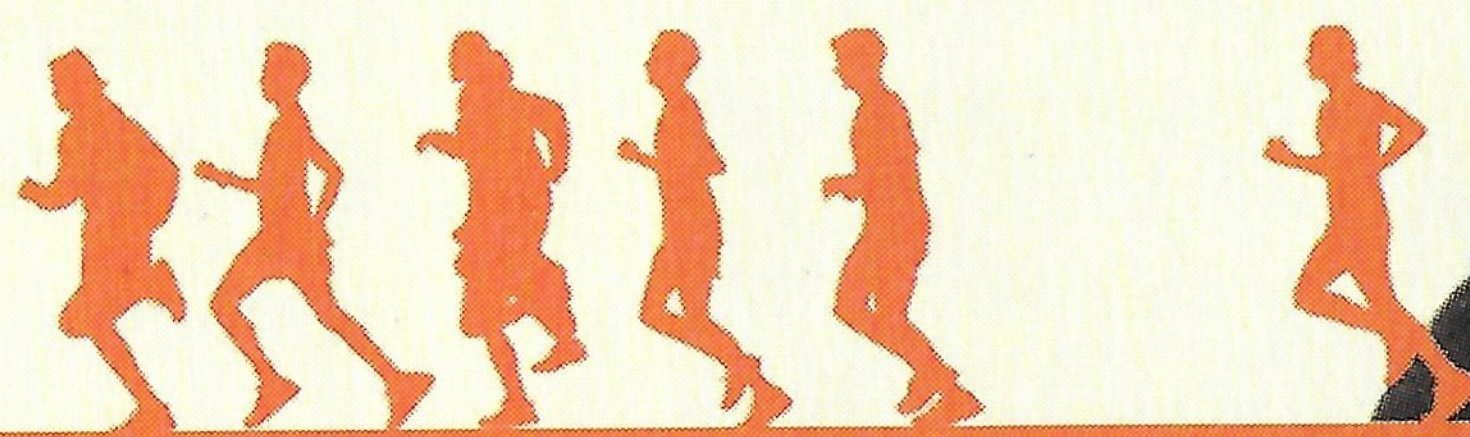
ジュノとマーク、それぞれ好きなバンド、ホラー映画の話で盛り上がり、ホラー映画のDVDを観るふたり。その後、映画を観ると嫌がるというヴァネッサが帰宅して、ジュノは胎内の赤ちゃんの写真を見せるが、ヴァネッサは、ジュノが本当に赤ちゃんを渡してくれるのか、まだ不安に思っていた。

一方、マークが一人でいるところへ訪ねていったことを、「世の中にはルールがある」と諭すブレンとケンカしたジュノは家を飛び出した。彼女の足はポーリーの元へ向かう。「よければまた僕たち付き合おうよ」と言うポーリーの言葉に、「私たち、付き合ってた?」と返すジュノ。彼女はポーリーにカトリーナという別の女の子と付き合うことを勧めるのだった。

リアと一緒にショッピングセンターへ出かけたある日、ジュノは小さな女の子をあやすヴァネッサの姿を偶然見かける。そして少女に優しく接するヴァネッサを見て、ヴァネッサを真に信頼する気持ちが芽生えていくのだった。

※STORY2は結末に触れています。

WINTER



学校ではみんながお腹をつかむのよ。私は超有名。
あだ名は“クジラ”。





Critique

普遍を射貫く、『JUNO／ジュノ』のさらなる魅力

川口 敦子

臨月のおなかを突き出して、前を向き自分のペースで歩くジュノ、16歳。

ぼんぼん飛び出す痛快で独特のこぶしもきいた言いまわし。誰のものでもない言葉と態度。彼女自身であるためにぎりぎり守っていたい何かを信じてそれをまっすぐ人にも投げかけるヒロインは妊娠という思いがけない事態にも、へこみはしてもへこたれず対処すべき現実と将来の夢とをきっぱり視野に入れ最善の解決策をみつけ出す。誰もと同様に青あざだらけの心をやわらかに抱えつつ思うに任せぬことごとと潔く向き合っていく。そんな独自性と普通さの絶妙の混合ぶりで異なる世代の様々な観客を魅了するジュノ。彼女を擁するいっぽうで、映画は異なる世代の面々を様々にヒロインの周りに配し共感の芽を植えつける。見る者それぞれの思いをそれぞれに託せる誰かがぬかりなく描き込まれている。だからこそ映画『JUNO／ジュノ』は真っ只中の十代から元若者までを普遍の“胸キュン”で巻き込むウェルメイドな青春映画となり得ている。

無論、映画の磁力は初の一作でオスカーに輝いた脚本家ディアブロ・コディの人間観察力、世界に対して素晴らしく研ぎ澄まされた目と耳に多くを負っているだろう。注目したいのは彼女がLAでもニューヨークでもなくアメリカの平均値を代弁するシカゴ出身という事実。ここにも『JUNO／ジュノ』が射貫いた“突飛の皮を着たまとも”の魅力の素をみてとることができるかもしれない。

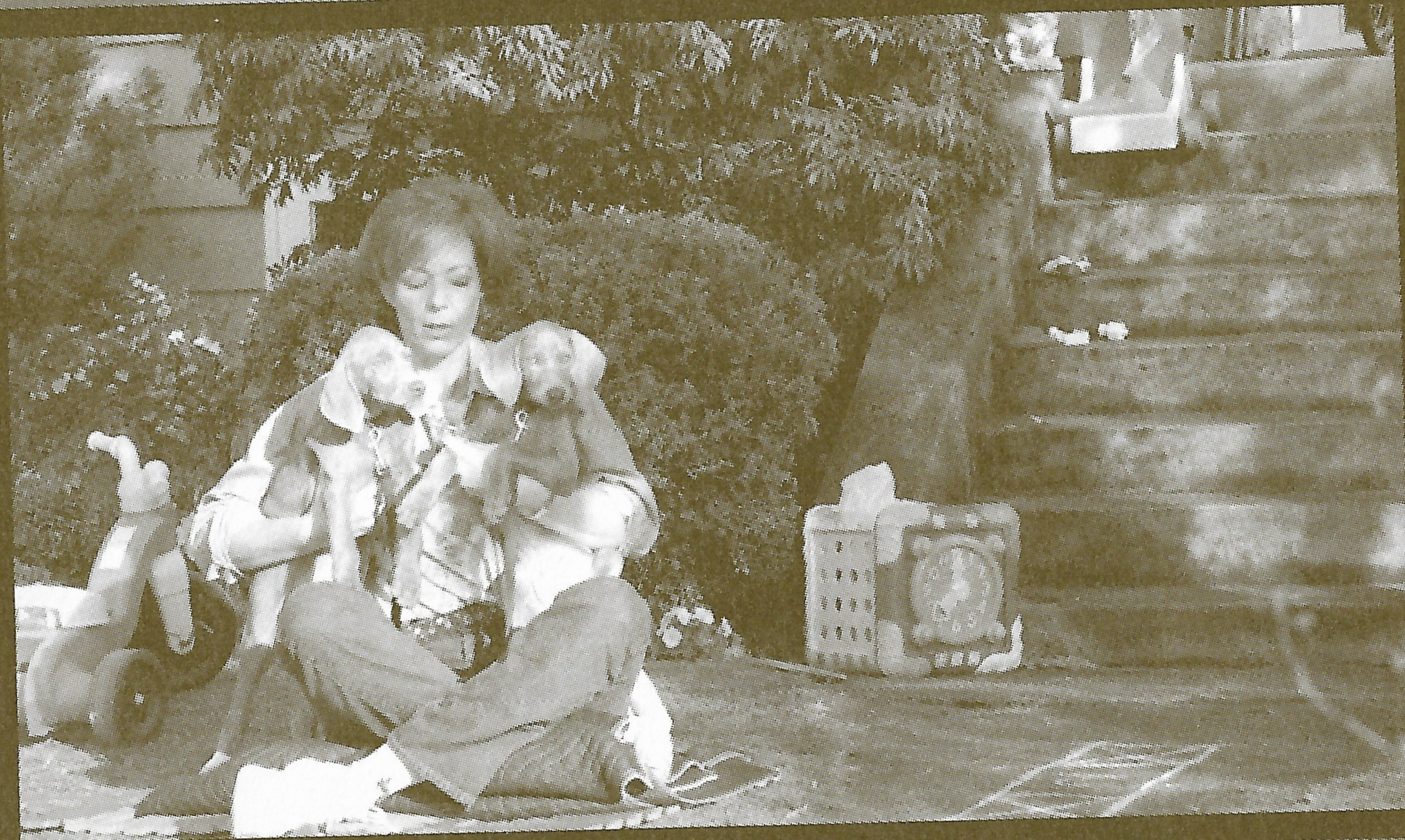
16歳の妊娠というプロット上の要に関しても映画は奇を衒わず地に足ついた姿勢で描く。今すぐぼんと出せるものなら即、進呈しちゃう所だけど——などと里親候補を前にあっけらかんと突き放した言い方をするヒロインが“爪”も“鼓動”も備わった芽生えたばかりの生命に対して示す敬意はセンセーショナルリズムの対極で、どこまでも昔ながらの人としての正しさ、美しさを睨んでいる。そんなまともさの部分で想起されるのが80年代後半、ジョン・ヒューズ(彼の本拠地もシカゴだった)仕掛けの“等身大”で“普通”の十代を擁した青春映画、そのヒロインの座に君臨したモリー・リングウォルドのこと(ちなみに彼女にもティーン・ペアレンツ役で主演した『この愛に生きて』(88)があった。『ロッキー』のジョン・G・アビルドセン監督ならではの不屈のスポ根ならぬラブ根テイストの一作だった)。なかでもパンクな不機嫌顔で古風なけなげを包んだ彼女の代表作となったのがヒューズ製作総指揮+脚本の『プリティ・イン・ピンク／恋人たちの街角』(86)だ。

大人がきめつけた紋切り型でなく、卒業アルバムにいる誰かのような個性を切りとり当事者の十代の支持を集めたヒューズの青春映画。その多くで語られたのが“テイク・ア・スタンド”という言葉で、要は「自分の生き方を貫く」——という真っ当さが映画の芯になっていた。『プリティ〜』でも、身分違いのお坊ちゃまとの恋の行き違いに悩み、それでも自分らし

く後悔しない道をとヒロインが手作りのピンクのドレスでただひとりプロムに乗り込むという、言ってしまうとあまりに古めかしい筋の中でみつめられる自分の生き方、その正常さが実は胸に迫ってしまったりするのだった。今どきまさかの純心無垢の価値、それがありふれた青春を怒涛のようにのみ込んで素直に感動させる一作を差し出す仕組みはまさに『JUNO／ジュノ』と響きあう。プロム、ロッカーが並ぶハイスクールの廊下から、完璧すぎるインテリア、プレップ・ルックで苦笑させるヤッピー・カップル対ヒロインの慎ましいワーキングクラスの暮らしと、意外に根深い貧富の差への眼差しまで時代は変わっても相変わらずな、だから多分、他人事でなく迫ってくる要素を押さえて普遍を完遂する『JUNO／ジュノ』は、しかし等身大の青春映画の定番を射貫くだけでは収まっていない。『プリティ〜』との異同の部分にさらなる魅力が浮上する。それは違いを認めて共に生きる意志、血の絆に頼らない家族というものへの志向とに支えられた魅力といってもいい。

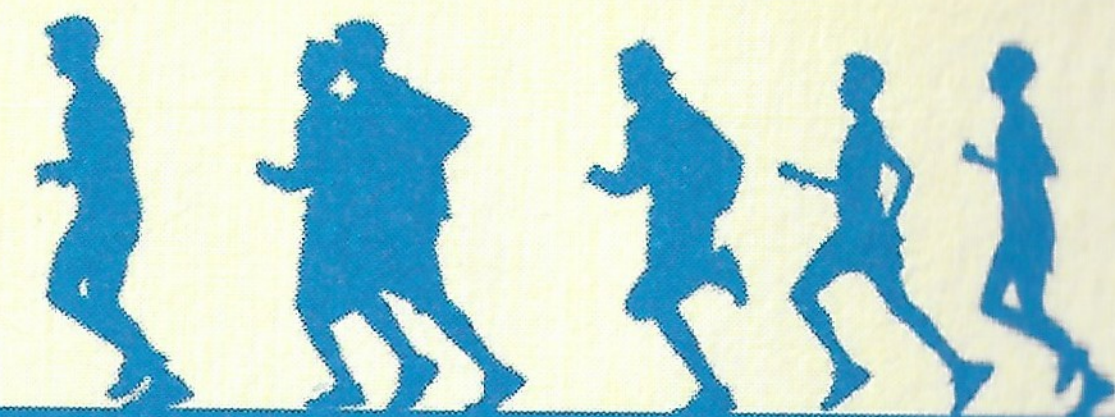
例えば映画が十代と同等に大人の側もクリシェ（常套句）から解き放つ決然とした手さばき。娘に妊娠宣言された両親の反応、おろおろと憤然と困惑とを必死で抑えて、話を聞こうとする姿勢、解決策を探ろうとする様は、聞く耳持たないおなじみの親像を気持ちよく裏切っていく。あるいはヒューズ映画旋風の頃まさに青春の只中にいた筈の里親カップルの夫、ロックスターへの夢を胸の奥で燦らせ続けている“大人子供”ぶりに等身大を見出す観客も少なくはないだろう。かたや彼の妻ヴァネッサの場合にも服も生き方もジュノとはあまりに違ってお互い「無理ッ」と一蹴し合う関係が当たり前には予期されるのだが、映画はそんなふたりの間に美しい友情の花を咲かせてしまうのだ。その意味では義理の母ブレンについても映画は“^{ママは}継母＝悪役”という偏見に満ちた物語的常道をあっさり覆してみせる。ジュノと胎児の栄養を管理し、膨らむお腹に合わせてジーンズを改造し、娘を侮辱する言動にはがっぴんときつい一発をお見舞いする。犬好きで、でもジュノのアレルギーのせいで飼えないから写真や絵の切抜きをためこんでいる。「わたしだっていろいろ我慢してる」と面と向って言える関係の率直さ、爽快さ。

そんなブレンと生まれたばかりの赤ちゃんを抱くヴァネッサとを温かく並べる新生児室の場面は、直前的一场で祝福されるジュノと父の血の絆と対をなしつつ違いを超え血だけではない共生によるサバイバルを思わせて胸に染みる。それは自らも父母の離婚、壊れた家庭の経験者に他ならないジュノが元気の底に抱えているじくじくとまだ生乾きの傷、そうして同様のじくじくを抱えたアメリカの、全世界の、誰かへ向けた健やかな解答を指し示しもあるだろう。そうやって普遍を極める青春映画『JUNO／ジュノ』は同時にその進化形をもそこでしたたかに探り当てている。



かわぐち・あつこ

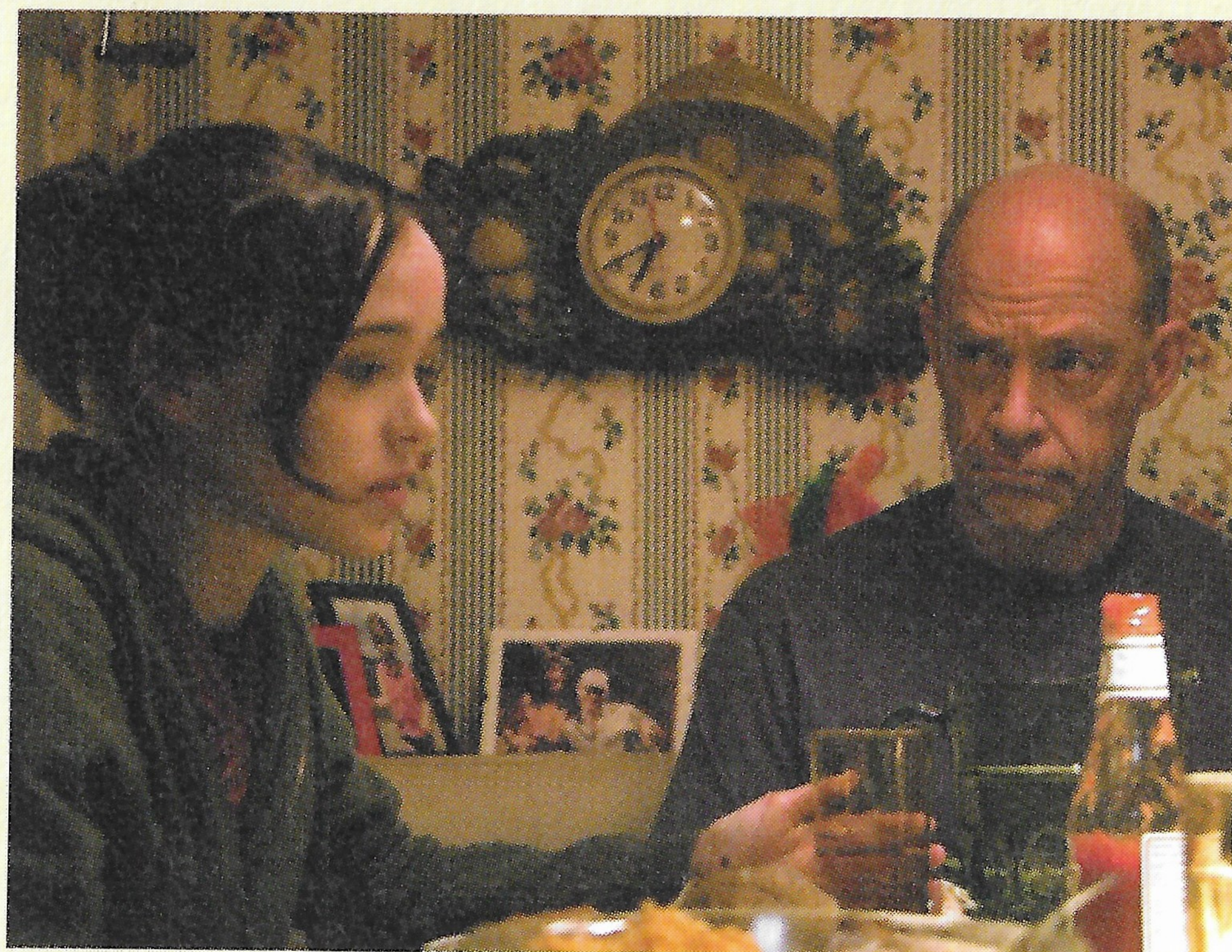
映画評論家。主な著書に「映画の森——その魅惑の鬱蒼に分け入って」（芳賀書店）、訳書に「ロバート・アルトマン わが映画、わが人生」（キネマ旬報社）。現在、「インビテーション」「信濃毎日新聞」などに映画評を執筆している。



Story 2

音楽や映画の話のできるマークは、ジュノにとって大切な存在になっていた。そんなある日、前にジュノが勧めたカトリーナをポーリーがプロムへ誘ったと聞いたジュノは動揺する。そのことが元でポーリーとケンカになるが、「僕こそ君に腹を立てて口をきかなくて当然なんだ」と言われてしまう。怒りと悲しい気持ちを持て余し、マークの元を訪れるジュノだったが、ヴァネッサと別れるという突然のマークの宣言に衝撃を受ける。しかもマークはジュノが喜ぶと思っていたと言う。そこへヴァネッサが帰宅し、彼女にマークが子供を育てる自信はないと言ったことで、よその家庭みたいに壊れてほしくないというジュノの願いは壊れてしまう。ローリング家を飛び出し、号泣するジュノ。涙を拭いた彼女は、ローリング家のドアにヴァネッサ宛の手紙を貼り付けた。

“人類への信頼を失った”ジュノを迎えたのは、いつもの我が家と父マックの温かい声。「ふたりの人間が永遠に一緒にいられるのか？」というジュノの命題に、「何よりも大事なものはありのままのお前を愛する人を見つけること」と答える父。ジュノが思い浮かべたのはポーリーだった。



翌日、ポーリーの家ポストには、彼の大好きなオレンジ・ミントが溢れるほど入っていた。それはジュノの仕業。運動場を走るポーリーに近づくジュノ。“お腹じゃなく、顔を見てくれる”ポーリーに、好きだと告白するジュノは、ポーリーとキスをする。

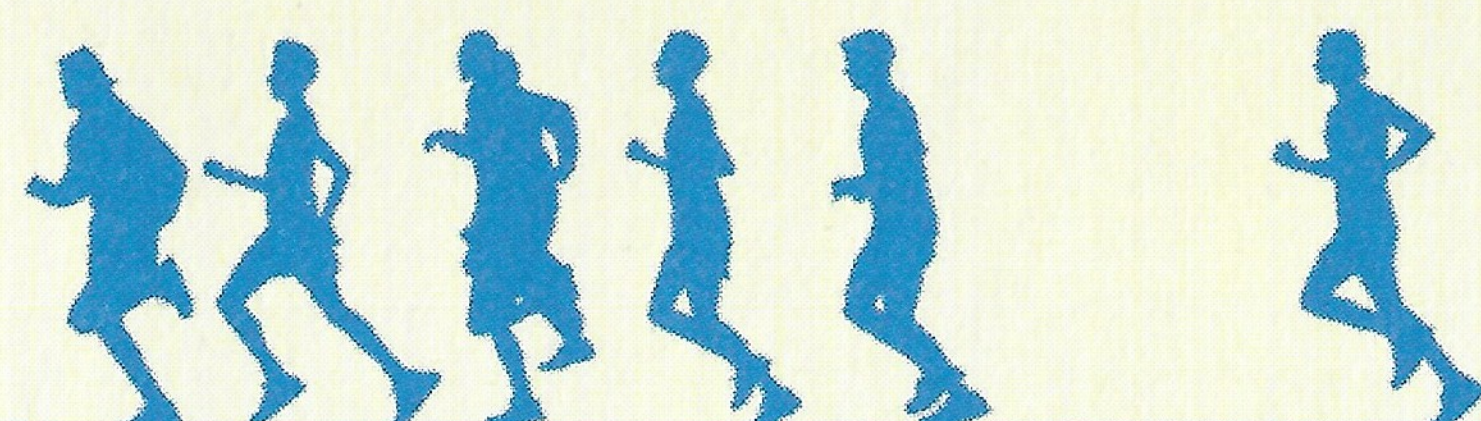
いよいよ、ジュノの出産のときがやってきた。何も知らせなかったポーリーが、出産後のジュノの病室を訪れる。その頃、新生児室にはヴァネッサの姿があった。ジュノが産んだ男の赤ちゃんを、こわごわ抱くヴァネッサ。様子を観に来たブレンが言う。「新米ママ。今は何もかもが怖い」

ジュノがローリング家のドアに貼り付けた手紙。そこには「ヴァネッサ。あなたがまだその気なら、私もそのつもり」と書かれていたのだった。

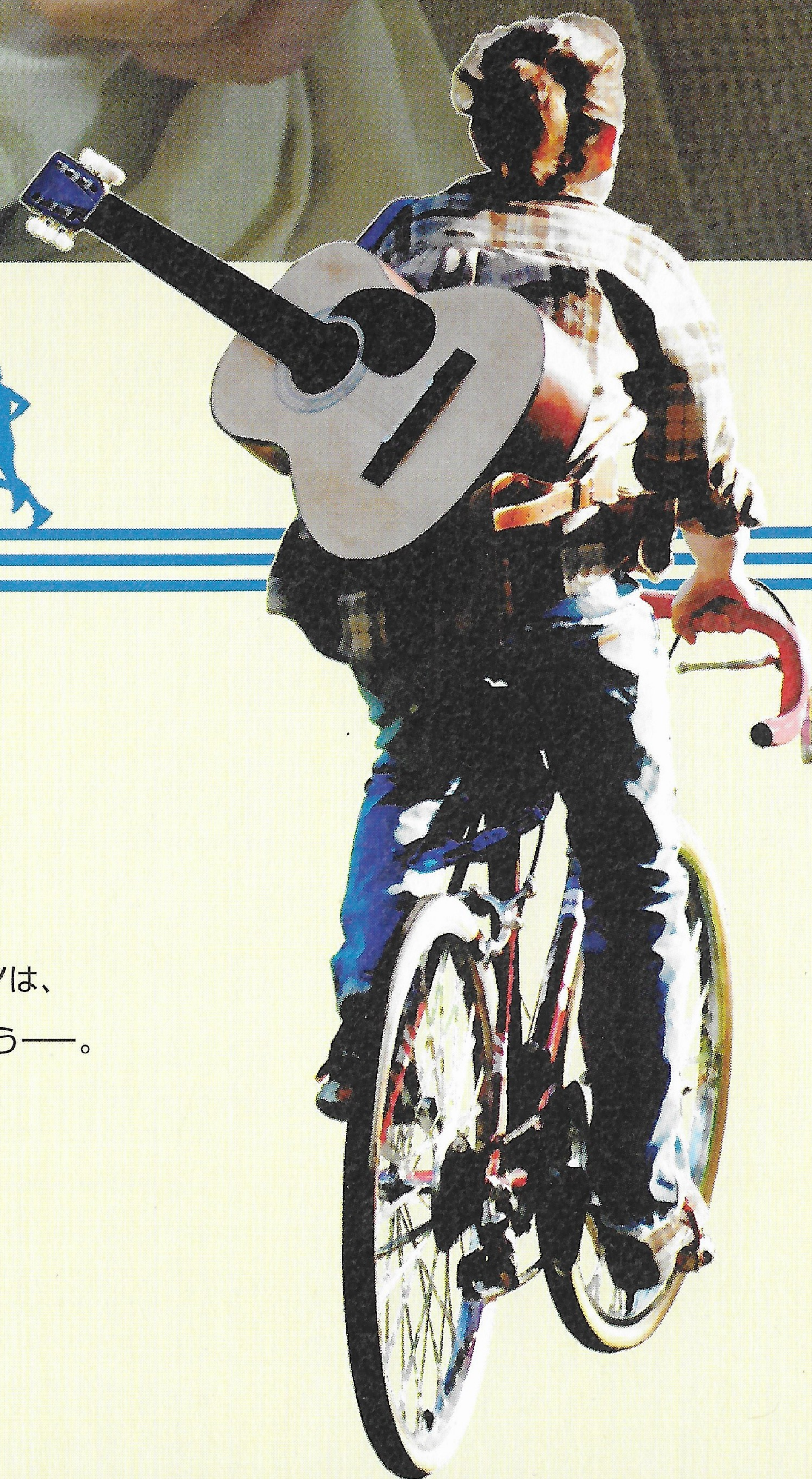




SUMMER



夏。ギターを背に自転車に乗るジュノは、
今は彼氏になったポーリーの元へ向かう――。





Ellen Page
エレン・ページ

JUNO



Michael Cera
マイケル・セラ

PAULIE



Jennifer Garner
ジェニファー・ガーナー

VANESSA

Cast Profile

Ellen Page / エレン・ページ

●ジュノ

1987年2月21日、カナダ・ハリファックス生まれ。義母役のアリソン・ジャネイは「彼女は怖いもの知らずで、すばらしい女優よ!」と手放して絶賛。里親希望のヴァネッサを演じたジェニファー・ガーナーも「『JUNO / ジュノ』で初共演して彼女の演技にビックリしたわ。目が離せない女優になるはず」と後輩を褒めちぎる。ライトマン監督は「エレンには、ジュノがやること、話すこと、感じることがわかっていて、スイッチを切ったり、入れたりするように対応できるんです。あれは、すばらしい見ものですよ」と語るように、本作でゴールデン・グロブ賞やアカデミー賞をはじめ、国内外の映画賞で主演女優賞を受賞、またノミネートされた。

10歳の時にテレビシリーズ「Pit Pony」で女優デビューし、ジェミニ賞のチルドレンズ・プログラムでの最優秀演技賞にノミネート。以後、カナダのテレビと映画で活躍し、国内では早くから演技力のある若手として高く評価されていた。彼女の演技力が知られることになったのは、2005年にサンダンス映画祭で評判を呼んだデヴィッド・スレイド監督の密室スリラー「ハード キャンディ」(05)。狂気めいた少女を熱演し、相手役のパトリック・ウィルソンを食う

存在感を見せつけた。その後、『X-MEN:ファイナル ディシジョン』(06)で、美少女ミュータントのキティ役に抜擢される。現在、ドリュー・バリモア初映画監督作のコメディ「Whip It」(09)に取りかかっている。

Michael Cera / マイケル・セラ

●ポーリー

1988年6月7日、カナダ・オンタリオ州生まれ。9歳の時からカナダで子役として活動を始め、テレビを中心に活躍。アメリカでは、エミー賞受賞のシリーズ「ブル〜ス一家は大暴走!」(シーズン1&2・03~05)のジョージ・マイケル・ブルース役で有名で、昨年は『40歳の童貞男』のジャド・アパトゥ製作のおバカな青春コメディ『スーパーバッド 童貞ウォーズ』(07・未)に主演し、大ブレイク。これまで、ジョージ・クルーニー監督『コンフィッション』(02)にチャック・パリスの少年時代で登場しているほか、デニス・クエイド主演、グレゴリー・ホブリット監督のSF『オーロラの彼方へ』(00)などにも出演している。現在はジャック・ブラックと共演する冒険コメディ「The Year One」(09)、セックスに右往左往する少年たちを描くコメディ「Extreme Movie」(08)などが

公開待機中。趣味のギターを劇中にページと披露している。

Jennifer Garner / ジェニファー・ガーナー

●ヴァネッサ

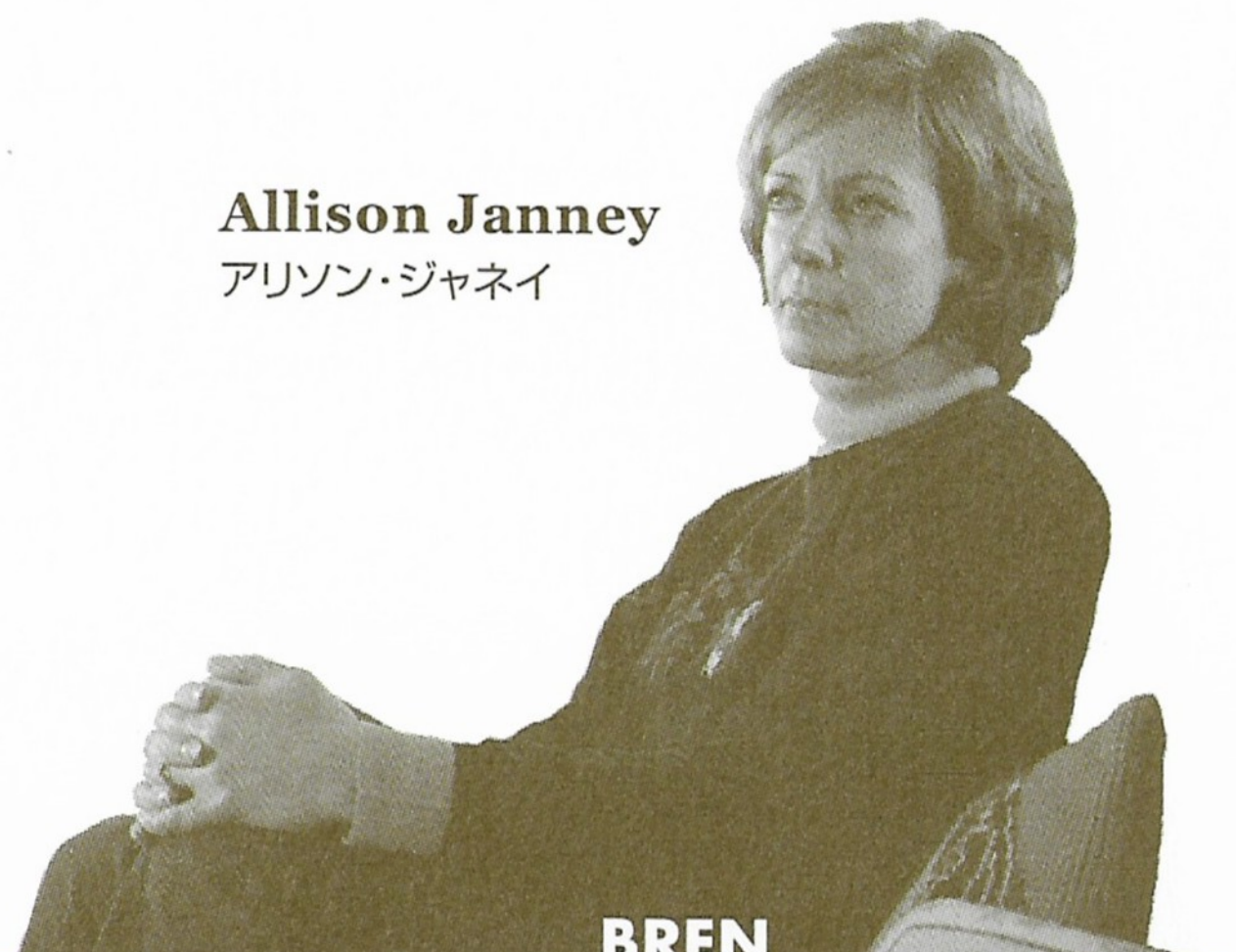
1972年4月17日、アメリカ・テキサス州生まれ。アメリカでは人気ドラマシリーズ「エイリアス」のシドニー・プリストウ役で知られ、エミー賞に4回、ゴールデン・グロブ賞4回(うち02年は受賞)、映画俳優協会賞に2回(うち05年は受賞)ノミネートされた。マーク・スティーヴン・ジョンソン監督の大作『デアデビル』(03)で共演したベン・アフレックと結婚したことで知られる。彼女が同作で演じたエレクトラが人気となり、ロブ・ボウマン監督によるスピンオフ『エレクトラ』(05)で主演も務めた。ほかに、本作で夫婦を演じたジェイソン・ベイトマンと共演した、ピーター・バーグ監督『キングダム / 見えざる敵』(07)では、中東のアメリカ施設爆破事件を調査するために現地へ送り込まれるアメリカ政府の捜査官チームの紅一点として登場する。現在、日本映画「いま、会いにゆきます」のハリウッドリメイク「BE WITH YOU」(09)の製作中で、竹内結子が演じた秋穂澪を演じる予定。その他、嘘をついたことのない人々が暮らす世界を描くコメディ「This

Jason Bateman
ジェイソン・ベイトマン



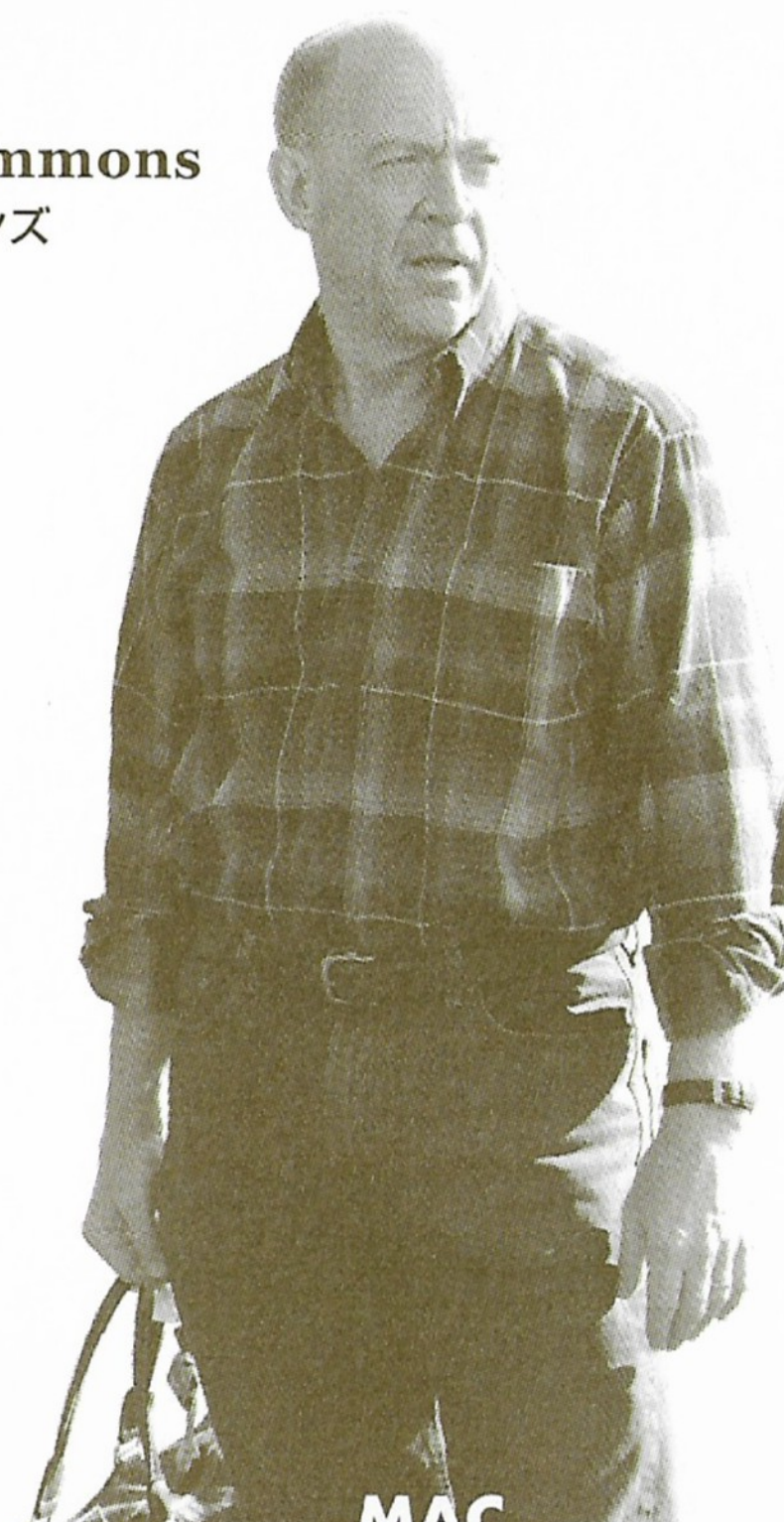
MARK

Allison Janney
アリソン・ジャネイ



BREN

J.K. Simmons
J.K. シモンズ



MAC

Olivia Thirlby
オリヴィア・サルビー



LEAH

Side of the Truth” (09) や、マシュー・マコノヒー共演のロマンチック・コメディ“The Ghosts of Girlfriends Past” (09) が控えている。また、自身の製作会社ヴァンダリア・フィルムズでは、“SABBATICAL” (09) などをプロデュースしている。

Jason Bateman / ジェイソン・ベイトマン

●マーク

1969年1月14日、アメリカ・ニューヨーク州生まれ。1981年に長寿ドラマ「大草原の小さな家」で子役デビューを果たし、数々のテレビドラマを中心に出演する。2004年には変人揃いの家族の中で、唯一まともなマイケルを演じたコメディ・シリーズ、「ブル〜スー家は暴走!」(03~05)でゴールデン・グローブ賞のコメディ・シリーズ部門最優秀主演俳優賞を受賞する。長編映画デビューは、父のケント・ベイトマンが製作した『ティーンウルフ2/ぼくのいとも狼だった』(87)。ほかに『クリスティーナの好きなコト』(02)、『ドッジボール』(04)、本作で夫婦役を演じたジェニファー・ガーナーと共演した『キングダム／見えざる敵』(07)など。次回作はケヴィン・マクドナルド監督の“State of Play” (09)。

Allison Janney / アリソン・ジャネイ

●ジュノの義理の母 ブレン

1959年11月19日、アメリカ・オハイオ州生まれ。映画、ドラマ、舞台で活躍する実力派女優のひとり。大学1年の時にポール・ニューマンに実力を認められ、ニューヨークで演劇を学び、アーサー・ミラーの「橋からの眺め」のブロードウェイ出演で、トニー賞にノミネートされた経歴を持つ。映画出演は、『シェフとギャルソン、レストランの夜』(96)、『パーフェクト・カップル』(98)、『セレブリティ』(98)、『6デイズ／7ナイツ』(98)、アカデミー賞受賞の『アメリカン・ビューティー』(99)、『めぐりあう時間たち』(02)、『ファインディング・ニモ』(03)など多数。日本でも人気のあったドラマシリーズ「ザ・ホワイトハウス」(99~03)でのCJ・クレック報道官役ではエミー賞を4度受賞、ゴールデン・グローブ賞に4年間連続でノミネートされた。

J.K. Simmons / J.K. シモンズ

●ジュノの父 マック

1955年1月9日、アメリカ・ミシガン州生まれ。ライトマンの監督デビュー作『サンキュー・スモーキング』(06)で主人公ニッ

ク・ネイラーの頑固でやり手の上司BRや、メガヒットシリーズ『スパイダーマン』(02、04、07)で主人公ピーターに無理難題をふっかける熱血編集長役で強い印象を残す、名バイプレイヤー。本作では、ライトマン監督のお気に入り俳優として愛情深い父、マック役に抜擢された。ほかに、人気ドラマシリーズ「ERX 緊急救命室」(03~04)、「クローザー」(05、06)にも出演している。次回作はキューバ・グッティング・Jr.と共演する“The Way of War” (08)。

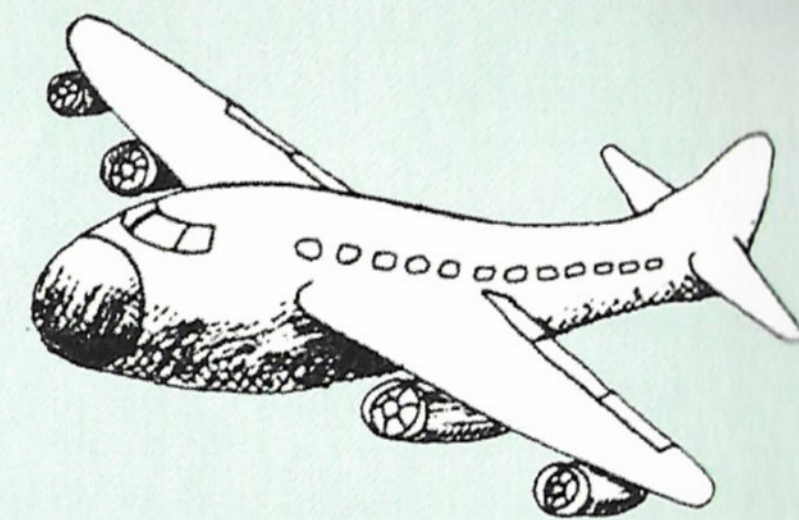
Olivia Thirlby / オリヴィア・サルビー

●リア

1987年、ニューヨーク州生まれ。アメリカン・グローブ・シアターと、ロンドンの王立演劇アカデミーでシェイクスピア劇の演技を学んだ本格派の若手女優。映画デビューは、ポール・グリーングラス監督の衝撃作『ユナイテッド93』(06)。現在、テレビドラマを含めて、出演作が目白押しの超売れっ子に。主な作品に、日本映画『秘密』のリメイクでリュック・ベッソン製作“The Secret ” (07)、ベン・キグスレー主演“The Wackness” (08)など。



エレン・ペイジ来日会見



映画『JUNO／ジュノ』で、今年のアカデミー賞主演女優賞にノミネートされたエレン・ペイジが、今年5月、日本での『JUNO／ジュノ』公開を前に来日。都内のホテルで開かれた会見では、ジャケットをはおりながらも、足下はスニーカーという飾り気のないファッションで登場。誠実に各記者の質問に答える姿が印象的だった。

ジュノは能動的で活発でエネルギーがあり、
ちょっと生意気。知的で賢い部分も持っている。

——高校生の妊婦という役をどう考えて演じられたのでしょうか？ またエレンさん自身には、母になることへ憧れなどはありますか？

こういった役を演じるときには……とてもよく書かれた脚本だったので、この役の真の部分、ジュノのハートにコネクションを作るということが一番大事です。ジュノがどういう人物かを理解するのが重要でした。妊娠は、彼女の人生のなかでの一部ですから、それを自分のなかで現実として、リアルに演じるということに集中しました。母親になる、ということについてはまだ考えてなくて、様子見です（笑）。

——なぜ、この映画は世界中の人々の心を掴んだのでしょうか？ またアカデミー賞主演女優賞にノミネートされたときの心境を教えてください。

最初に読んだときにびっくりしたほど、今まで読んだどの脚本よりも、この映画の脚本は素晴らしかったんです。誠意のある、正直で、深みのある、そして面白い脚本でした。すごく完成された脚本だったからこそ、たくさんの人々に訴えかけるものがあつたんだと思います。同時に、笑って楽しい時間を過ごせる、そして感動もできるという意味で楽しめると思います。それに北アメリカの映画のなかでは、最近は若い女性が主役というものが少なかったもので、それも影響したんだと思います。

オスカーのノミネートの瞬間はシュールな感じ、非現実的な感じでした。当時20歳の私にはリアルには感じられなかった。ほかにノミネートされたのは、私が尊敬する偉大な女優ばかりだったので、とても謙虚な気持ちになりました。本当に（ノミネートが）信じられなかった。ラッキーだったと思いますし、今回こういう役を演じられたことがハッピーだったと思います。

——16歳の少女の妊娠から始まる物語ですが、どのような視点やテーマを持って撮影に入ったのですか？ また、日本のどのような方々にこの映画を観ていただきたいですか？

先ほども言った通り、役のハートにコネクトすること、役に共感すること、役を理解することが大事です。ジュノはとても能動的で、活発でエネルギーがあり、ちょっと生意気なんです。そのバランスを見つけるのが重要でした。彼女は知的で賢い部分も持っているし……。



妊娠についてはいろいろな本を読みました。ただ、演じやすくなったのは、プラスチックで作ったお腹をつけたときから。すごく重くて、つけると自然に体勢も変わるし、動き方も変わるんです。

アメリカでは若い女性からお年寄りまで、車の中で(この映画の)サントラを聴いているのをよく見かけます。日本でも、年齢や性別を超越して共感していただければ嬉しいです。

——今回の役を演じて学んだことは何ですか？ また、映画での言葉遣いが独特で面白かったのですが、一番お気に入りの台詞を教えてください。

今回の役を通して学んだのは、いろいろな人に思いやりを持つべきで、優しくするべきだということです。また、娘の妊娠を喜んではいないものの、彼女が困難にぶつかったときにあらゆる愛情を注いだり、サポートをしようとする両親の存在は、このような題材の作品ではなかったことだと思います。そういうところがこの映画の素晴らしいところだとも思います。

台詞は、「中国へ行けば？ 無料iPodみたいに赤ん坊がもらえる(日本語字幕より)」という台詞が好きです(笑)。

——サントラの中でお気に入りの曲があれば教えてください。また普段はどのような音楽を聴かれますか？

サントラの中で気に入っている曲はCat Power(キャット・パワー)の「Sea of Love(シー・オブ・ラヴ)」です。病院でポーリーがジュノのベッドに一緒に入ってくるときに流れる曲ですが、大好きです。普段聴く曲は、キミヤ・ドーソン。実は彼女がモルディ・ピーチズにいた頃からのファンで、私が(ジェイソン・ライトマン)監督に彼女の曲を提案して、映画で使われるようになったの。普段は本当にいろいろなジャンルの曲を聞いています。音楽は、私にとってとても重要なものだから。

——今回の映画に出演して、ティーンエイジャーの妊娠に対するあなたの見解は変わりましたか？ また、そのことで論議が生まれたりしましたか？

特に見解が変わったということはありませんでした。もちろん私は産みたいと思う本人の味方です。ただし(産むにしろ産まないにしろ)両方ともオープンであるべきです。

映画のなかでジュノにはクリニックに相談して子供をおろすという選択肢もありました。しかし最後は産むことを決意します。(そのことについて)あまり論議したことはないですね。この映画は民主的で、両側の意見を示しているから。もしかしたら自分があまり耳にしていないだけなのかもしれないのですが。

——映画のなかにはスラングが多いのですが、どう思いましたか？

実はスラングの部分もとても気に入っていました。脚本を読んだときにも、そういうところに一番共感できたんです、私も高校時代には友達と自分たちの言葉というものを持ってたんです。ジュノと同じではないんですけども、自分たちだけで通用する言葉です。それがこの映画にユニークな部分を与えていると思いますし、私も気に入っています。



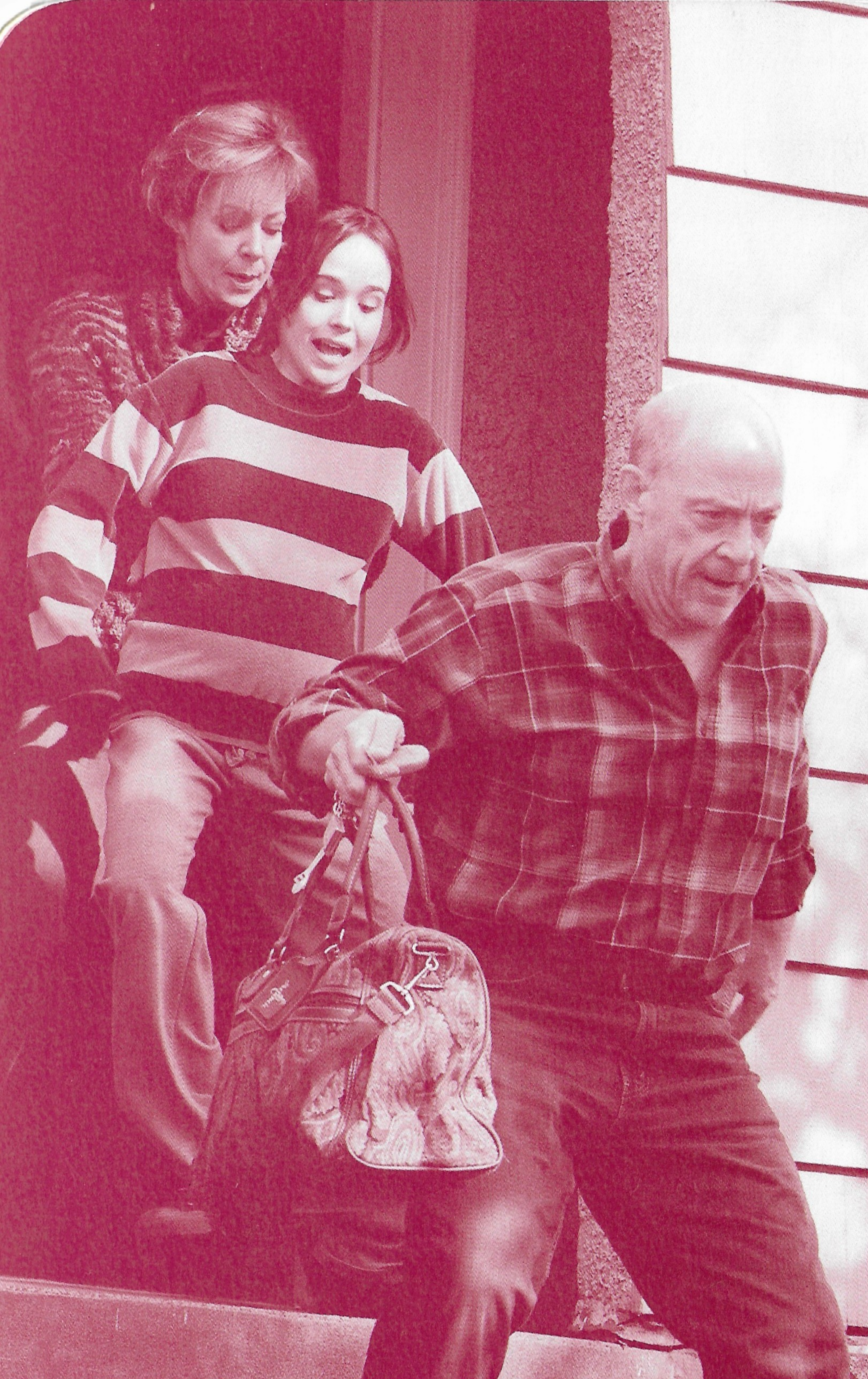
Column 監督が語る、女優エレン・ページ

映画『JUNO/ジュノ』を製作する際、主人公であるジュノを演じるのにふさわしい若手女優を探すことが、作品の成否に関わる重大な点だった。観客が、ジュノを理解するだけでなく、彼女の欠点やそのほかのすべてを、違和感なく受け入れるようなキャストが必要だったのだ。映画を監督したジェイソン・ライトマンは密室劇の映画『ハード キャンディ』でパトリック・ウィルソンを相手に熱のこもった演技を見せたエレン・ページが最適だと見抜いていたという。

「素晴らしい俳優を前にすると、彼らの顔にストーリーを語らせたいと思うものだが、エレンは特にそうだった。信じられないほど微妙な、細かいことを、顔の表情で見せる力がある女優だ。もし僕がテイクごと120個の注意点を与えたとして、彼女はそれらすべてを完璧にこなすはずだよ。多くの役者は上手に物真似するとか、リサーチを重ねてキャラクターに近づくとかするものだ。エレンがほかの女優と違うところは、ジュノがやること、話すこと、感じるものが分かっていること。電気のスイッチを切ったり、入れたりするように対応して演じるのには驚いたよ」

撮影中、エレン・ページに全幅の信頼を置いたライトマン監督は、エレンに助けられた出来事もあったと言う。

「ジュノが自殺を考えているように見えるシーンを撮影するとき、すごく迷ったんだ。“どうしてこんな深刻なシーンが、コメディの冒頭に出てくるのか？”とね。監督は撮影時に、迷いを見せてはいけないことはわかってたけれど……。とりあえず、あのシーンには首つりにぴったりな木と、コードみたいに長いリコリス(棒状のキャンディ)が必要だった。リコリスはもちろん別注だよ(笑)。すべての準備が整ってても、僕は本当にこのシーンが必要なのか確信が持てなかった。でも、エレンが首に巻こうとしたリコリスをかじるアイディアを出してくれてわかったんだ。つまり、ジュノは一瞬、もうこれで人生は終わりだと絶望するのに、次の瞬間には子供に戻っている。映画の中で、ジュノは何度も同じような思考回路で大事なことを決断する場面が出てくる。もう万策尽きた少女のように見せておいて、次には観客をフツと笑わせるジュノという人物像は、エレンだからできたことなんだ」



おちあい・ゆき

ライター。「SPRING」「JUNON」「nicola」などの女性誌や番組ガイド誌、広告を中心に活動。初鑑賞映画は幼稚園児時代の「サウンド・オブ・ミュージック」。高校時代「ストレンジャー・ザン・パラダイス」と「ディーバ」で、映画の美しさと面白さに目覚める。現在、予想外の妊娠を扱った邦画の現場を取材中。6歳男児の母でもある。

Critique

あなたにとって大切な、家族、友達、恋人の話

落合 有紀

『JUNO／ジュノ』は見るたびに発見があって、印象が変わる不思議な映画だ。私が初めて見たのは、アメリカでも公開前の時期で、もちろん字幕なし。オープニングを飾るセンスのいいアニメや、ジュノの部屋のキッチュなインテリア、ゆる〜い空気のサントラに“できるなコイツ”的な予感がしたけれど、残念ながら細かなニュアンスまで読み取れなかった。そのせいで、映画会社のスタッフも私も、すごく衝撃を受けたのだ。16歳で妊娠!? それを家族があっさり認めて、養子に出しちゃう!? 里親と恋愛関係になっちゃう!? 日本じゃ考えられないね、なんて。

それでも、ジュノのお父さんが彼女に語った愛についての話は、なぜだか伝わってきて、温かな気持ちになったのを覚えている。

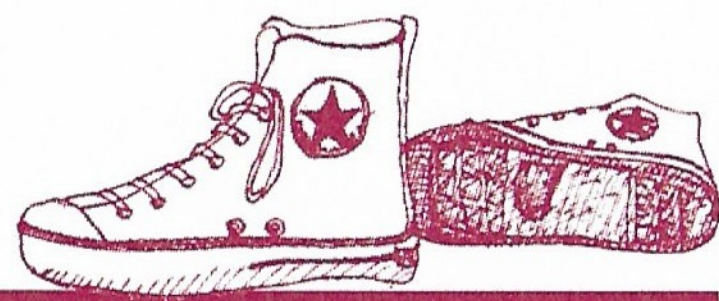
「どんな自分でも受け入れてくれる人を見つけるのが、いちばんだよ」

字幕入りになったものも含めて、計4回も見ただけで、『JUNO／ジュノ』は飽きることがない。見るたびに深みが増していく。最初は妊娠騒動と、ジュノの濃いキャラクターに釘付けになった。ジュノに自分の高校時代を重ねてみたり、シニカルなユーモアに笑ったり。でも、回を重ねると、ジュノの家族や友人たちが、どれだけ彼女を愛して、守ろうとしているか、その姿勢が色濃く浮き出てくるからおもしろい。

例えば、アホな女子高生に見えるけど、実はぶっ飛びすぎてジュノ以上におかしな親友のリア。ジュノのお腹が目立つようになると、学校では誰もがジュノのお腹をチラ見して避けようとするのに、リアだけはいつもジュノのそばにいてくれる。気を利かせてるのか、それとも超マイペースなのかわからないけれど、くだらないことをふたりでくっちゃべっては、ジュノをガス抜きさせる貴重な存在なのだ。ジュノが家族に衝撃の告白をするときも、里親を捜すときもサポートしてくれて——興味津々な気持ちを抑えきれない面も強いが——、口は悪いけど心から信頼できるソウルメイトなんだなと思わせる。

ジュノの家族構成は少々複雑で、実父マック、義母ブレンダ、年の離れた異母妹リバティ・ベルだ。実母は再婚して3人の子供を産み、幸せに暮らしている。ジュノの誕生日にはサボテンを送ってくるが、マクガフ家では溜まったサボテンを持て余し気味。それなのに、なおも、サボテンを贈り続ける。この行為から、実母がジュノを気遣えていないというのが窺える。普通、10代の女の子には服とか“好きなものを買ってね”とお金を贈るでしょう。父親のセリフから再婚が10年前だったことがわかるから、ジュノは幼児期にママとの別れを経験し、甘えたくてもママに甘えられなかったはずだ。義母には心を開ききれず——名前で呼ぶことからわかる——、喪失感と愛への渴望がジュノの心を乱し続けてきたんだろう。

時に殻に閉じこもってしまうジュノを、父のマックと義母ブレンダはそれぞれの方法で大切に育ててきた。もちろん、ブレンダは義理の親子関係ゆえに、ジュノに遠慮してる様子も描かれる。



だからこそ、ジュノの妊娠をきっかけに、初めて、母親らしいことができるわ! と大張り切りしちゃうのだ。ジュノに暴言を吐く居丈高な超音波技師を喝破し、ジーンズを妊婦用にリメイクしたりと、親子というより、女同士の絆を結んだふたりの共闘関係に、私はニンマリしてしまった。ベタベタしてないけど、こういう親子だっていいじゃん。

父マックは精神的にジュノと家族を支える。冒頭にも書いたように、ジュノが「カップルは永遠に愛し合えないの?」という嘆きにも似た疑問をぶつけたときに、最高の答えを教えてくれた。父と娘が辛い時を力をあわせて乗り越えてきたからこそ、わかりあえる絆。愛情を確かめられる安心感。ジュノが鎧を脱いで、年齢相応のか弱き少女に戻れるのは、父の前だけなのだ。残念ながら、その役目はすぐに、赤ちゃんの父、ポーリーにバトンタッチされちゃうんだけど。

そして、最重要人物の、恋人ポーリー。出産後、青春の過ちに泣き続けるジュノを、くるむように抱き続ける。悲しみと静かな温かさが支配するこのシーンは、試写室では号泣の嵐だった。健気にいたわりあうふたりの姿を見て安心したのは、観客だけでなく、ジュノの家族も同じだと思う。彼なら大丈夫。ふたりなら大丈夫。

『JUNO／ジュノ』を監督したジェイソン・ライトマン監督は、『ゴーストバスターズ』シリーズで知られるコメディ映画の名手、アイヴァン・ライトマン監督の長男だ。生後11日で父が製作する『アニマル・ハウス』の撮影現場に連れて行かれたというから、監督になることを約束されたようなものである。ただ、おバカな娯楽作を得意とする父は、賞レースとはあまり縁がない。息子が前作『サンキュー・スモーキング』でアカデミー賞脚色部門でのノミネートを逃したときに、いちばん残念がったのが、父だったという。そして、今年。アカデミー賞のノミネート発表で、監督本人も予想外だった監督部門に選ばれた時、すぐに父が泣きながら電話してきたという。「僕は父と素晴らしい関係を築いています。父は人生の多くを教えてくださいました。僕は父のような人生を目指しています」

ティーン妊娠というテーマに、パブロフの犬的にスキャンダラスな展開を期待してしまうのが、「14才の母」や「金八先生」がヒットする土壌の日本。でも、『JUNO／ジュノ』が描くのはそんなダークなことじゃなくて、家族の絆や確かな愛を手に入れて成長するひとりの少女の姿だ。『JUNO／ジュノ』のビターズウィートなハッピーエンドに泣けちゃうのは、ライトマン親子の確かな絆に裏打ちされているから。そして、自分の家族といちばんの友達、自分を受け止めてくれる恋人の顔が浮かぶから。

青春時代に何を大事にするべきか。自立した大人に成長するには? その答えが、『JUNO／ジュノ』にはある。見返すたびに、違う答えが見つかるはずだ。





Interview

世代を超えた、女性へのエールが込められた作品／脚本家・金子ありさインタビュー

取材・構成：相田冬二

——久しぶりに脚本の力を感じさせるアメリカ映画だという気がします。脚本家の方がご覧になるとどうなのでしょう？

観始めて5分ぐらいで、目の前の出来事が映画だということを忘れさせる力。どこか本当の田舎町の空から覗いてる感じのあのリアルさは、脚本と演出がかなり高い具合でマッチングしてないと生まれない牽引力だと思いました。脚本が素晴らしい時は演出も演技も素晴らしい。チームの力をとても強く感じました。すごく幸せな脚本の、世の中への出方だと思います。映画の持つ全ての力が呼び覚まされるストーリーであり、演技であり、演出であるという。

——緊密なチームプレイだったということですね。

本当に素晴らしいチームですよ。もちろん脚本へのリスペクトがあったし、そう思わせる素晴らしい、愛に溢れた脚本だったから、全部がうまくいったという感じがして。ちょっと羨ましくもあり（笑）。

——では、その上で伺います。脚本に関して感心した点は？

最初、ちょっと風変わりな女の子の青春記だと思ったんですね。アメリカって青春ものが上手

いから、それだけで充分だと思っていたら最後には、世代を超えた女性へのエールになってるんですね。そこは圧倒的に脚本の力だなと。たとえば、義理のお母さん。

——いいですね！ あのお義母さん。

個性的で、でもとても家庭的。そして赤ちゃんを譲り受けるジェニファー・ガーナー。彼女は生真面目なキャリアウーマン。世代別の女性へのエールになっているところが深いし、素晴らしい。さすが女性脚本家というか。私、いつも性別で観たりはしないんですけど、この映画は非常に女性を立ててると思いました。だって、あの作曲家の夫の消え方（笑）。

——見事にフェイドアウトしましたね（笑）。僕は同性として、あの消え方に妙なシンパシーを抱きましたけど（笑）。

あそこがね、命を生み出すのも、手渡すのも、受け取るのも女だっていうことだと思うんですよ。この脚本家さんの生き方であり、考え方なんでしょうね。

たとえばエレン・ペイジがショッピングモールで、ジェニファーが子供と遊んでるところを見るシーン。あそこは初めて彼女の素顔を垣間見て、認める瞬間。で、“あなたがそのつもりなら、私

もそのつもり”というメッセージにつながっていく。そういう女性同士の出逢いと認め合いがすごく立ってる。普通、高校生の妊娠ものだったら、相手の男の子との葛藤とか、心の揺れ動きのほうに寄りがちなところを、ちゃんと俯瞰で捉えている、その視野の定め方。これは(脚本の)ディアブロ・コディさんが、ずっとそうやって世の中を眺めてきたということだと思います。

——確かに物語の展開としてはジュノに寄り添っているのに、ジュノの揺れ動きに終始していませんね。それはつまりキャラクター造形がタフだということだと思うんです。ジュノは大人びてるというか、もちろんちょっと背伸びしてはいるんでしょうけど、決して動じない。たとえば最初から“私は悲劇の主人公よ”って感じで、動じまくってるヒロインとは全然違います。ひょっとすると胸の内はそうなのかもしれないけど、そうは見せない。

ジュノは決して、誰のせいにもしないですね。

——そうなんです!“男のせいで私は孕ませられた”みたいな感じがまったくない。で、すごく誇らしい歩き方をしてる。

その辺は、リアルでありながら、ちょっとファンタジー入ってる。アメリカならではのヒロイックさを踏襲してる気がします。だから、アメリカ映画のいいところがすごく詰まった映画だなとも思ってる。アメリカ映画の何がいちばん他国より優れているかというヒーローもの。アクションヒーローだけがヒーローじゃない。ごく普通の人が高貴な行動をとって、何かしらみんなの理想を喚起するというのもまたヒーローの姿で。こんな片田舎の少女が、二本の足でちゃんと立って、自分の往く道を決めていく。それはアメリカン・ニューヒーロー誕生の瞬間だと思います。

——そうかあ! ジュノは日常の中のヒーローなんですね。だから、みんな応援したくなるし、付き合おうと思うんでしょうね、この物語に。

女の子が男の子と一線を越す。その大冒険をちゃんと描くことはとても大事。たとえば、こわくてこわくてたまらないんだけど、彼となら、と思うのか。それとも、少女ならではの官能性ってありますよね、逆に誘うように一線を越すのか。ジュノは完全に後者でしたよね。そういうある種、『映画でよく見るシーン』にクリエイターの魂を宿したり、込めたりするということをおろそかにしてはいけないと思う。『JUNO/ジュノ』がスピリッツにあふれた映画になっている理由はそういうところにもある気がする。だから、作り手たちの、こういう女性であってほしい、こういう親であってほしい、こういう世の中であってほしいということが響くし、届くんじゃないでしょうか。

——ジュノの出発点がしっかり描写されているからこそ、僕たちは彼女についていけるし、この映画についていける。

説明的でないところもいいですね。ジュノが最後の最後に、自分の中にずっとあったある気持ちに気付いて運動場に行くけど、そういうのを友達との会話とかで説明しなくても、全部伝わってくる。ひとりの女の子の冒険譚であったことがよくわかります。ジュノが結局、母性に目覚めて生き方を変えないのも、すごくよかったし。

——普通、目覚めますよね。でも、それって結局、社会通念としてそうなるから……みたいな不自由さを感じることも多くて。社会通念を受け入れることがリアルと勘違いされてる傾向がありますね。物語はそんなものじゃない、と思いたいですけど。

普通なら、ジュノが赤ちゃんを抱いてみるシーン、作りそうですね。

——その辛さをぐっところえて、手渡すとか(笑)。浪花節的湿っぽさがないのは、確かにアメリ

カのヒーローものですね。

いま話しながら整理がついてきたんですけど、ジュノがファンタジーで、周りがリアルなんですね。全部、脚本の作りがそう。だからすごく絶妙なブレンドになってる。リアルとファンタジーの二刀流って、すごく難しいんですよ。だからこそ、“日常から一歩踏み出す、小さな大冒険”が成立したんでしょうね。監督も、脚本家も、まだとても若い。ハリウッドという産業に入っていく一歩前で産み落とされた傑作。なんて、つい、作り上げたチームの裏のドラマまで、勝手に想像して楽しんでしまいました(笑)。



かねこ・ありさ

1973年生まれ。95年、「ときわ菜園の冬」でフジテレビヤングシナリオ大賞を受賞し、「TOKYO23区の女」(96)で脚本家デビュー。05年以降は、映画『電車男』(05)をはじめ、『ラフ ROUGH』(06)、『7月24日通りのクリスマス』(06)、『陰日向に咲く』(08)など、映画の脚本を次々に手がけている。そのほか、TVドラマ作品に、「がんばっていきまっしょい」(05)、「サブリ」(06)、「牛に願いを Love&Farm」(07)などがある。

取材・構成:あいだ・とうじ

1965年生まれ。「インビテーション」、「びあ」などの雑誌、映画の劇場用パンフレットのほか、昨年から映画のノベライズ本として「キサラギ」、「鳳凰 わが愛」、「KIDS」(すべて角川文庫)を手がけ、最新刊はWOWOWで放送したドラマ「パンドラ」(幻冬舎文庫)。編著書に「映画×音楽 セッション・レポート103」(音楽之友社)などがある。



Column

低予算のインディペンデント映画は、
いかにして全米のハートを掴んだか？

小西 未来

〈本年度アカデミー賞で最優秀脚本賞を受賞!〉

〈全米ボックスオフィスで1億ドル突破の大ヒット!〉

『JUNO／ジュノ』が日本で封切られるころには、こんな景気の良い宣伝文句が躍っているに違いない。これらは紛れもない事実であるし、胸を張って然るべき偉業である。しかし、アカデミー会員のお墨つきを貰った事実や、全米ボックスオフィスで1億4300万ドルもの大ヒットを記録したという情報から連想されるイメージは、『JUNO／ジュノ』の魅力を的確に伝えているとは言い難い。なにしろ、『JUNO／ジュノ』は低予算のインディペンデント映画であり、ヒットはおろか、アカデミー賞候補になることすら期待されていなかったからだ。エレン・ペイジ演じる主人公のように小さなこの作品が、超大作と肩を並べたことは、映画業界はもちろん、製作に関わったキャストやクルーにとってもサプライズだったのである。

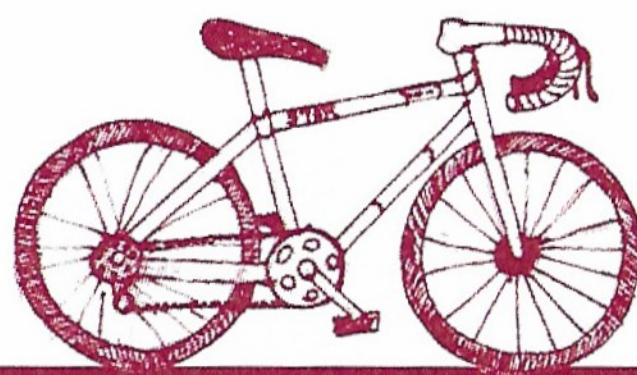
ディアブロ・コディが執筆した『JUNO／ジュノ』の脚本は、製作に入る前からハリウッドの映画関係者のあいだで話題になっていた。コディはその独創性と台詞使いのセンスが認められて、スティーヴン・スピルバーグ監督から新ドラマ“The United States of Tara”の脚本家に任命されたほどである。

『JUNO／ジュノ』の映画脚本がそれほど高い評価を得ていたにもかかわらず、いざ製作準備に取りかかると、プロデューサー陣は650万ドルしか集めることができなかった。いまやハリウッド映画の平均予算は5500万ドルと言われ、インディペンデント系の『ノーカントリー』ですら2500万ドルと、製作費が高騰している。そんななかで、『JUNO／ジュノ』が650万ドルでの映画製作を強いられたということは、映画スタジオや投資家から作品の商業性が低いと見なされた証拠にほかならない。

理由は至って単純だ。『JUNO／ジュノ』が十代の妊娠というシリアスな問題を扱っているためである。

十代の妊娠は、アメリカでは社会問題となっている。民間非営利団体National campaign to prevent teen and unplanned pregnancyによると、アメリカにおいて20歳までのあいだに妊娠する女性は全体の3分の1で、その大半が望まぬ妊娠であるという。この割合は、先進国では他に例を見ないほど高く、教育から保険医療、貧困、家庭内暴力に至るまで、さまざまな社会的問題と直結している。

さらに、望まぬ妊娠というトピックは、政治論争の引き金でもある。キリスト教信者にとって中絶は同性婚と同様のタブーであり、その一方で、中絶の権利を求める容認派が市民運動を展開している。中絶を支持する、しない、という選択は、選挙の行方を変えるほど大きな争点であり、『JUNO／ジュノ』は政治論争に巻き込まれるリスクがあった。脚本家のコディ自身、ストーリーのなかで主



人公のジュノが養子縁組を選択することから、中絶容認派からのバッシングを覚悟していたという。

『JUNO／ジュノ』がシリアス・ドラマならば、これほどの懸念を抱く必要はなかったかもしれない。しかし、これは大きなお腹のまま平然と学校に通い続ける少女が主人公のコメディ映画であり、しかも、彼女は妊娠のきっかけになったセックスを反省しない。映画脚本を読んだスタジオ重役が、政治家や民間団体から非難を浴びる可能性に怯えたとしても不思議はない。

『ウェイトレス～おいしい人生のつくりかた』や“Knocked Up”など、望まぬ妊娠を描いた作品の全米公開が同時期に重なったせいもあって、『JUNO／ジュノ』は予想通り、政治論争に巻き込まれた。しかし、若者のあいだで口コミが一気に広まり、ボックスオフィスで快進撃を続けるようになると、批判の声は掻き消される。じっさい、ブログやSNS（ソーシャルネットワーキングサービス：それぞれの人脈をネットで公開し、紹介し合うサービス）は、セリフからファッション、音楽の好みに至るまで、ジュノに関する話題で埋め尽くされることになった。

ジェイソン・ライトマン監督の前作『サンキュー・スモーキング』がたばこの善悪ではなく、選択の自由についての諷刺コメディだったように、『JUNO／ジュノ』は、十代の妊娠という単純なテーマを描いたものではない。妊娠という不測の事態を経て、個性的な主人公が一回り成長する物語であり、彼女の生き様こそが、ティーンの共感と呼んだのである。

「男の子には『ライ麦畑でつかまえて』があるけれど、女の子にはそうした作品が見あたらない。だから、この脚本はものすごく新鮮だった」

ジュノを演じたエレン・ページがこう説明するように、これまで青春小説や映画に登場する反抗的な主人公といえば、決まって男子だった。一方、マスメディアで描かれる女子といえば、異性の反応を気にしてばかりいるタイプか、黒ずくめの服を着た暗いタイプで、ロールモデルとすべき存在が見あたらない。そんななか、流行には無頓着で、頭脳明晰、シニカルだけれどロマンチストという少女ジュノが、多くの若者に支持されたのは想像に難くない。

「ジュノにしても、ボーイフレンドのポーリーにしても、周囲の言うことや流行なんかに惑わされずに、自分らしくふるまう勇気があるの」

ジュノの魅力について、エレン・ページはこう語る。

「中学校や高校のときなんて、人と違ったことをするのはひどく怖いよね。でも、彼らにはそれをやる勇気がある。安っぽく聞こえてしまうかもしれないけど、『自分らしくあれ』っていうのが、この映画のメッセージだと思う」

このメッセージが若者の心を捉えたからこそ、低予算のインディペンデント映画は、サプライズヒットを記録することができたのだ。ジュノをロールモデルにした若者たちが社会に巣立っていくとき、きっと世の中はもっと素敵になるに違いない。



こにし・みらい

LA在住のフィルムメーカー&ライター。大学卒業後渡米、南カリフォルニア大学の映画芸術学部で映画製作を学ぶ。現在、雑誌「CUT」にて「映画の『科学と学習』」、「ハリウッド通信」、eiga.comにて「From Hollywood Cafe」を連載中。

Production Note

ジュノの誕生

『JUNO／ジュノ』の誕生は、プロデューサーのメイソン・ノヴィックが、ネットサーフィン中に、今回脚本家デビューしたディアブロ・コディのブログ“The Pussy Ranch”を発見したのがきっかけだった。ノヴィックは、ディアブロの超現代的で、歯に衣着せぬ表現とユーモアあふれる文章の虜になった。

「仕事でおもしろいはずのものをたくさん読んでるけど、たいていはひどい代物さ。だけど、彼女のブログは本当におもしろくて、半年間、毎日アクセスして、毎日笑わされた。それで、彼女に電話をかけて訊ねた。“やあ、僕は映画プロデューサーで、あなたのブログのファンです。脚本を書いてみませんか？”ディアブロは“考えたことはあるけど、書いたことないわ”と返事しました」

出版の当てもないままに、ストリッパー時代の回顧録「Candy Girl: A Year in the Life of an Unlikely Stripper」を書いていたディアブロは、ノヴィック経由でニューヨークのエージェントに原稿を送り、ゴッサム・ブックス社から2005年12月に出版された。衝撃的で赤裸々な内容と、超現代的な言葉遣いが、賛否両論、話題沸騰になった。

「その頃には、ディアブロと『Candy Girl』の映画化について話を進めていた。でも、彼女は脚本は未経験だから、スタジオを説得するためにサンプルの脚本を書いてほしいと頼んだ。2～3週間後、彼女から『JUNO／ジュノ』が送られてきた時には、僕は度肝を抜かれたね。登場人物たちのハートが、ページから飛び出してた(笑)。撮影に使用した脚本は初稿とほぼ同じなんだけど、すごく珍しいことなんだよ」

ディアブロはデビュー作のアイディアが高校時代にあると言う。

「『JUNO／ジュノ』は、高校時代に親友が妊娠し、出産を決意したときの実話がモデル。ジュノとリアが交わすセリフも、私と親友の下ネタやバカ話がネタなのよ」

本作で華々しい脚本家デビューを飾ったディアブロのもとには、仕事が殺到。スティーヴン・スピルバーグの企画“The United States of Tara”の脚本を担当し、また、書き下ろしの脚本“Girly Style”はユニバーサル・ピクチャーズに、“Jennifer's Body”はフォックス・アトミックに売却済みだ。エッジのきいた言葉選びと、鋭い人間観察眼、ブラックユーモアを武器に、ディアブロ・コディはハリウッドが最も注目する女性のひとりになった。

里親夫婦の亀裂を衣裳で表現

衣裳デザイナーのモニク・プリュドムは、里親候補のヴァネッサとマークのカップルが、初めてジュノと父親に会うシーンの衣裳に、夫婦のすれ違う心を表現させている。

「ヴァネッサの服はシンプルでとても趣味が良いんですが、あまりにこだわりすぎなところもあるの。ビシッと白いカフスと襟を見せるファッションは、とても角張った感じがするでしょ。ジェニファーの素敵なあごも、ある種のいかめしさを役柄にもたらしていると思うわ。特に最初のシーンでね。コ

ンサバなヴァネッサと釣り合うように、マーク役のジェイソンには似たような保守的な青いセーターを着せてるの。つまり、彼は自分が望まない人を目指すように、妻から押しつけられているという意味よ。話が進行して、マークとジュノが仲良くなるにつれて、マークがジュノのようなロックテイストのTシャツやネルシャツを着て、どんどんカジュアルなファッションに変わっていくことに気づくかもしれないね」

家族を描くライトマン監督

ライトマン監督の前作『サンキュー・スモーキング』ではタバコ業界の裏側を描きながら、父である主人公のニック・ネイラーと息子の固い絆で締めくくられたように、『JUNO／ジュノ』でも父と娘の心温まる会話と互いを思いやる空気がふんわりと流れる。ライトマン監督はこう説明する。

「僕は父と素晴らしい関係を築いています。父は人生の多くを教えてくださいました。僕は父のような人生を目指しています。だから、ライトマン家の絆が映画に反映するのは当然のことでしょうね」

ライトマン監督の父は、『ゴーストバスターズ』シリーズなどを作ったコメディ映画の名匠アイヴァン・ライトマンだ。先日のアカデミー賞ノミネート発表の際、監督自身も予想外だった監督賞のノミネートに、いちばん喜んだのが父だったという。

「ディアブロとエレンがノミネートされるのを確認していたんです。監督部門の発表では、次の作品部門のノミネーションが聞きたいばかりに“とっとと進め!”なんて思ってたので、自分の名前が聞こえた瞬間、フリーズしました。父からはすぐに電話がありました。去年は『サンキュー・スモーキング』の脚色部門でノミネートの可能性があったのに果たせず、父は落ち込んだ様子で電話をかけてきたんです。今年は……泣いていました。僕が誇らしくて、胸がいっぱいになっていたみたいでした。自分の子供を持つまでは、父の感激を僕は理解できないんだろうな」

オープニングのアニメについて

ジュノが家からドラッグストアへ向かう様子を実写とアニメをミックスした不思議なオープニング・タイトルに演出したのは、シャドウプレイ・スタジオ(<http://www.shadowplaystudio.com>)。ライトマン監督の前作『サンキュー・スモーキング』でも、シャドウプレイ・スタジオは、タバコのパッケージを元にした、しゃれたオープニング・タイトルを作成した。今回は手描きのフレーム・ショットをハイスピード・カメラで撮影し、ストップ・モーション風のアニメに組み立てている。

「彼らとは、東京で開催された短編映画祭〈ショートショート フィルムフェスティバル〉で知り合った。彼らの作品は“THE SKY IS FALLING”という短編で素晴らしい映像だったよ。僕らはまるで同級生みたいに、2000年は世界各国の短編映画祭と一緒にツアーしたんだ」



Column

日本とアメリカ、それぞれの養子縁組事情

■日本の養子縁組

日本の養子縁組は古くは主に「家のあとつぎ」を確保するための、いわゆる婿養子、相続問題上の都合での成人の養子が多かった。現行民法での「普通養子」という手続きでも、実際にはこの「婚姻付随縁組」がその過半を占めている。また、1988年から新たに施行された「特別養子縁組」は、6歳未満（前から養親が面倒をみていた場合は8歳未満）までの児童のため、養親子の間に実の親子の関係を築くことを目的とした制度だが、親戚関係でない児童と養子縁組することは少ないという。縁戚関係でない児童の親となる見近な方法として、全国里親会などが推進する「里親制度」を利用して、様々な事情によって家庭で暮らせない児童の里親になり、養子縁組へ進めるかを考える機会にもできるが、実際には養子を目的とした里親登録者は少なく、1998年の里親委託児童数は2,100人程。日本での児童の養子縁組が少ない背景には、養子縁組に関する情報が少ないこと、少子化志向、育児嫌いの傾向などが関係しているとも言われている。



■アメリカでは？

アメリカは児童福祉の観点から、国全体を挙げて養子縁組に取り組んでいるため、数多くの養子縁組が成立している（1997年9月から98年10月までに公の児童養護施設から養子縁組に移った児童は3万6,000人にのぼる）。アメリカでは日本の「家のあとつぎ」といった観念がなく、里親制度や養子縁組の情報が身の回りにあるので、普通のこととして受け入れやすいこともあるだろう。

養子縁組に関する法は、現在すべての州がそれぞれ持っている。養子縁組の方法は、民間の機関が行う国内養子縁組や国際養子縁組をはじめ多岐にわたるが、国内の乳児の養子縁組で一番多いのは、オープン・アドプションと呼ばれるもの。民間の機関が定めている養親の年齢や宗教、不妊の証明などの指針に縛られず、実親が養親と自由に交流でき、さらに出生後すぐに乳児を託されることなどが人気の理由で、乳児の養子縁組の約半数がこの方法で行われているという。

参考文献：湯沢 雅彦監修「養子と里親——日本・外国の未成年養子制度と斡旋問題」
（日本加除出版株式会社発行）

Directors Statement

監督より一言

『JUNO／ジュノ』はティーンエイジャーの妊娠というよりも、この映画は人間関係の微妙なバランスを描いた作品です。

僕が12歳のとき、両親は養子をとることにしました。僕の家は（ヴァネッサとマーク夫妻の）ローリング家に非常によく似ていました。インセンスのスティックやプレキシガラスに入れた装飾品、一家が真っ白な服を着て写っている（そう、それがうちの家族です）写真が飾られていたから。ある朝、居間に呼ばれた姉と僕は、ソーシャルワーカーが、養子を迎えるのにふさわしい一家かどうかを判断しに家にやって来ると言われました。それは、僕たち一家がどれくらい優れたファミリーかを見るためのオーディションでした。

もちろん、今振り返ってみると僕らはふさわしい理由で養子を迎えることにした、ビシッとした……楽しく愛情あふれる一家だったことがわかります。でも、その当時は、プレッシャーを感じていたのを覚えています。あのソーシャルワーカーの目に何時間もさらされ、イギリスの小説に書かれているような生活をしているふりをしていたこと。「オレンジジュースをどう？」などと言って。

ジュノのストーリーはディアブロ（・コディ）が子供の時に経験したことに基づいています。彼女の高校時代の親友の一人が妊娠し、赤ちゃんを産もうとした時の話です。ディアブロは、どうして映画化することにしたのかという質問をよくされます。彼女が考えた最初のシーン——つまり、これは『JUNO／ジュノ』の中核となるものですが——は、ジュノが子供の両親になるかもしれない人たちと会う、ローリング家での面会シーンでした。あのシーンに出てくる登場人物たちの関係には、ひどく複雑なものがあります。

すなわち……

☆通常はヒーターのサービスをするためにしか、こういう“上流の”家には足を踏み入れたことがない中流の父親が、今は王族のように丁重に扱われている。

☆親という次のレベルに行くことが不安な30歳の男性は、妻をなだめることと、ユニークなティーンエイジャーに惹かれる気持ちの間で揺れている。

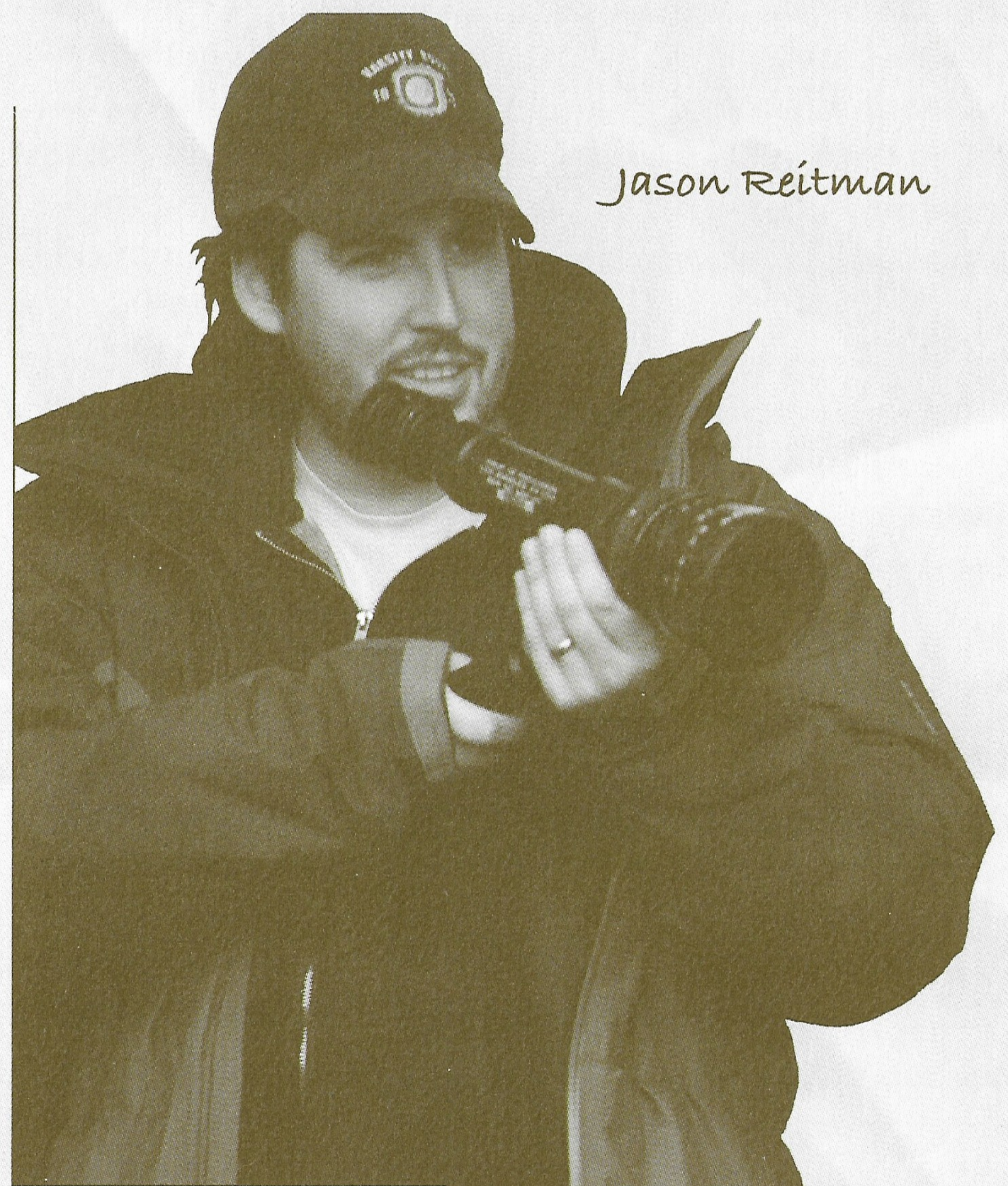
☆自分の子供が持てない30歳の女性は、ショッピング・センターで普通なら無視するようなティーンエイジャーに依存している。彼女は、妊娠を不便と考える少女の信頼を得ようと、細心の注意を払っている。

☆普通なら、上流階級のコミュニティの門に向かって卵を投げつけるような若い16歳の少女が、今は大人たちの面接を行っている。

結局、『JUNO／ジュノ』はティーンエイジャーの妊娠というよりも、こういった人間関係の微妙なバランスを描いた映画です。ディアブロの脚本では、これらの人物それぞれに、洗練されたリアリズムと敬意を持って接近しています。

映画を成功させるためには非常に多くの要素があります。映画作りの仕組みは複雑なので、一つだけを取り上げることはできません。しかし、あのシーンとあの登場人物たちへのアプローチを考えると、僕とディアブロは、あれやこれやで、あのシーンに登場する居間で向かい合う両方の側に座ったことがあるような気がします。あれは、そういう経験の組み合わせなんです。それぞれの観点で協力することによって、映画はユーモアだけでなく温かみを感じさせるものになりました。

監督／ジェイソン・ライトマン



Writers Statement

脚本家より一言

16歳で(ありそうもないことですが)真の愛を見つけたジュノのように、私はすばらしい映画的な“初体験”ができて運が良かった。

私はディアブロ・コディです。えっと、実際の名前は違うんですが、でも、誰もそんなこと気にしないですよね？ だって、ハリウッドでは何かを考案することは奨励されていて、報奨されるぐらいなんですから。ハリウッドというのは、“ごく自然に”光り輝く女性たちが(文字通り)歯までまっ白に漂白され、腐敗することのない革になめされる街です。今生の敵同士がかんしゃくを抑え、力に媚びるハグを交わす場所。空でさえも、蒸し暑い午後にはマットペインティングの背景画のように見え、雲はジェーン・マンスフィールドの髪型のようにきっちりとおさまり、太陽は無遠慮にぎらぎらと照らします。どれもなかなかクールとはいえ、“本物”ではありません。

これは、私がいまだに『JUNO/ジュノ』——あけすけに言いたいことを言う、ちょっと変わった作品——が映画になったことにショックで口がふさがらない理由の一つです。私は、この脚本をミネソタで書きましたが、あれは、論理的には自分に対するストライキとなるような状況でした。時には台所のテーブルで、またある時には、地元のスーパーで、あるいは、仕事場での15分の貴重な休憩時間にいくつかの台詞を書いたこともありました。『JUNO/ジュノ』は私の秘密の情熱を注ぐ対象となり、彼女と過ごせる時間を色気づいた女子高校生のように待っていました。私に映画の脚本が書けるなんて誰も信じなかったでしょうし、自分自身も思ってもいませんでした。残酷なバーバンク(Burbank, LA)で作品を売り飛ばす低俗な脚本家たちとは違い、私は気楽な孤立状態のなかで本を仕上げました。

皮肉なことに、このまったく中西部的な脚本に息吹を注いだのは、典型的なハリウッド・ボーイであるジェイソン・ライトマンでした。つまり、彼はいかさまの映画製作王朝の末裔という意味です！

彼こそは、子供時代に『ゴーストバスターズ』〈父親のアイヴァン・ライトマンが監督・製作〉を個人的に知っていた(80年代に子供だった人なら、これがどれくらいすごいことなのか、分かるでしょ?)ような人です。とはいえ、サンセット通りのガン・ショップで初めて会った彼は、この近辺ではめったにないような温かみと本物らしい輝きを発していました。彼はあまりにクールで、一流監督の息子にしてはあまりにリアルに見えたのです。詳しく説明させてください。つまり、私は、大学時代はMTVを見て過ごし、哀れな中流階級の親のすねをかじっていました。一方で、いわゆる“特権階級の子供”だったジェイソンは、初の短編映画の資金稼ぎのため、南カリフォルニア大学でカレンダーの広告を売っていました。彼は、その血統にはそぐわない労働観念の持ち主です。

ジェイソンと私はすぐに意気投合しました……彼は私のタトゥーが怖かったとからかいますが(笑)。私は、本当のことを言えば彼の才能が怖かった。私は脚本に関して自信をかき集めていましたが、ジェイソンのような人——自身がすばらしい脚本家である——が、『JUNO/ジュノ』を監督するために自身の作品を保留してくれるなどとは予想できませんでした。でも、彼はまさにそうしてくれて。数ヶ月後には私たちはヴァンクーヴァーで撮影を始めていました。本当に信

じられないことでした。

エレン・ペイジやアリソン・ジャネイのような役者が、まだ映画化されていない脚本、「不活発で、自力では何もできない“青いベイビー”」に息を吹き込むところを見ることがどんなものか、言葉では表せません。私は何時間もモニターを見つめていて、精神的に興奮しまくっていました。あれ以上に楽しいことがほかにあるでしょうか……実際は『JUNO/ジュノ』の脚本を書くこと、あるいはこういう才能ある人たちに脚本を引き渡すことぐらいでしょう。

私は『JUNO/ジュノ』以後、他の脚本を書いていますし、事情が許せば、もっとたくさん書きたいと思っています。でも、ジェイソンによく言われることですが、映画の第一作というのは1本だけです。16歳で(ありそうもないことですが)真の愛を見つけたジュノ・マクガフのように、私は可能な限りすばらしい方法で映画的な“初体験”ができて、運が良かったと思います。脚本から製作、公開という全工程が、とても温かく爽快で、何よりも本物でした。ハリウッドでは、これはCAA〈ハリウッドの最大手のタレント事務所〉のパーティに出る、お刺身料理よりも珍しいことです。

脚本/ディアブロ・コディ

Diablo Cody



Music

この映画を好きな人は、きっと音楽も欲しくなる!

赤尾 美香

もし今あなたが、映画を観た帰りの電車の中だったとしたら。帰り着いた自宅のベッドの上だったとしたら。もしかしたら、お風呂の中かもしれないけれど……どこにいるにせよ、頭の中ではきっと、ジュノとポーリーのつたなくもキュートなデュエットが聞こえていることだろう。ラストシーンでジュノとポーリーが歌う「エニワン・エルス・バット・ユー」は、確かに『JUNO/ジュノ』という映画においてはエンディングを飾っているけれど、ジュノ&ポーリーの物語においては、きっと始まりの歌なんじゃないかと思う。この曲は、キミヤ・ドーソンとアダム・グリーンによって1994年に結成されたモルディ・ピーチズというユニットのもの。当時、キミヤ21歳、アダム12歳という驚きの年齢差をものともせず、しかもステージ上ではキミヤがウサギになったりネコになったりコスプレ三昧(時にはアダムも)。そんなユニークなアプローチも手伝って、モルディのDIY精神溢れるキッチュでチャーミングなポップ・ソングはシンパを獲得していったのだが、ジュノを演じたエレン・ペイジも、その中のひとりだったようだ。

「映画の撮影が始まる2ヶ月前、僕のオフィスでブラブラしていたエレンに『ジュノはどんな音楽を聴くと思う?』と尋ねてみたら、間髪入れずに『モルディ・ピーチズ!』と叫んで、瞬間に僕のコンピュータで曲をダウンロードしていた」と語るのは、監督のジェイソン・ライトマン。このエレンの叫びをきっかけにキミヤの起用がトントン拍子に進んでいった。モルディ休止中の現在、キミヤはソロ等での活動を行なっているが、本作に起用されたアンツィー・パンツもまた彼女が結成したユニットで、ヴォーカルのレオは弱冠13歳だという。

16歳の女子高生でありながら、イギー&ザ・ストゥージズやパティ・スミス、ブロンディ等70年代パンクをこよなく愛し、ホラー映画が好きで、歯に衣着せぬ物言いをし、群れることなく、独立心に満ちた本作の主人公ジュノ。けれど、平気そうに見える顔の裏で、彼女の心はずっと揺れ続けている。大きく、小さく、縦に、横に。本作において音楽は、そんな揺れを私たちに伝えてくれ、また時には他の登場人物とジュノの関係性を浮き彫りにしたりもする。赤ちゃんの義父候補であるマークは、元バンドマン(メルヴィンズの前座を務めたことが自慢)で、今は生活の為にCM音楽制作をしているヤッピーという設定。そのマークが、並々ならぬ思い入れでジュノに薦めるのはソニック・ユースによるカーペンターズのカヴァー「スーパースター」だ。かつてはバンドマンだった彼に「スーパースター」の歌詞そのものが響くのか、はたまたこの曲がバンドをやっていた自らの青春時代を思い出させるのかは分からないが、ジュノにその思いを共有させるのには、そもそも無理があったはず。未だ過去を捨てきれないマークと、そんなことはお構いなしの妻ヴァネッサのすれ違いぶりは、ヴァネッサがペンキ塗り時に着用して汚しまくったアリス・イン・チェインズのTシャツが象徴していると言えるだろう。

キミヤとは同世代であり、ニューヨーク個性派人脈の核をなす存在に成長した女性シンガー・

ソングライター、キャット・パワーが歌う「シー・オブ・ラヴ」(50年代末にフィル・フィリップス&ザ・トワイライタースがヒットさせ、カヴァー多数)や、日本でも人気のベルセバことベル&セバスチャンの「みんなの望むわたし」や「ピアザ、NYのキャッチャー」、それにザ・キンクスやモット・ザ・フール、ヴェルヴェット・アンダーグラウンド……といった往年のロック・ソングと、既存の曲であっても、ジュノが過ごす、“一筋縄ではいかない人生のうちのたった1年”の場面場面を鮮やかに見せてくれる選曲が魅力だ。この映画を好きな人は、きっと音楽も欲しくなる。でなければ、今どきのヒット曲など1曲たりとも収録されていない本作のサントラが、全米チャート1位の座まで獲得したことの説明がつかないではないか。



あかお・みか

ライター／編集者。洋楽専門誌「ミュージック・ライフ」編集部を経て、フリーランスに。得意分野は洋楽ロック、特にアメリカのルーツ・ロックやインディ・ポップ、シンガー・ソングライター系を中心に執筆活動している。映画と音楽の密接な関係にはかねてより興味津々、両者が相思相愛で結ばれている作品には目がない。

Soundtrack

『JUNO/ジュノ』 オリジナル・サウンドトラック

<収録曲>

- 1 All I Want Is You オール・アイ・ウォント・イズ・ユー
／BARRY LOUIS POLISAR バリー・ルイ・ポリサー
- 2 My Rollercoaster (JUNO Film Version) マイ・ローラーコースター
／KIMYA DAWSON キミヤ・ドーソン
- 3 A Well Respected Man ウェル・リスペクテッド・マン
／THE KINKS ザ・キンクス
- 4 Dearest ディアレスト
／BUDDY HOLLY バディー・ホリー
- 5 Up The Spout アップ・ザ・スパウト
／MATEO MESSINA マテオ・メシナ
- 6 Tire Swing タイヤ・スイング
／KIMYA DAWSON キミヤ・ドーソン
- 7 Piazza, New York Catcher ピアザ、NYのキャッチャー
／BELLE AND SEBASTIAN ベル・アンド・セバスチャン
- 8 Loose Lips ルース・リップス
／KIMYA DAWSON キミヤ・ドーソン
- 9 Superstar スーパースター
／SONIC YOUTH ソニック・ユース
- 10 Sleep (instrumental) スリープ
／KIMYA DAWSON キミヤ・ドーソン
- 11 Expectations (Remastered Version) みんなの望むわたし
／BELLE AND SEBASTIAN ベル・アンド・セバスチャン
- 12 All The Young Dudes すべての若き野郎ども
／MOTT THE HOOPLE モット・ザ・フープル
- 13 So Nice So Smart ソー・ナイス・ソー・スマート
／KIMYA DAWSON キミヤ・ドーソン
- 14 Sea Of Love (Remastered Version) シー・オブ・ラヴ
／CAT POWER キャット・パワー
- 15 Tree Hugger トゥリー・ハガー
／KIMYA DAWSON & ANTSY PANTS キミヤ・ドーソン&アンツィー・パンツ
- 16 I'm Sticking With You アイム・スティッキング・ウィズ・ユー
／THE VELVET UNDERGROUND ヴェルヴェット・アンダーグラウンド
- 17 Anyone Else But You エニワン・エルス・バット・ユー
／THE MOLDY PEACHES モルディ・ピーチズ:《映画主題歌》
- 18 Vampire ヴァンパイア
／ANTSY PANTS アンツィー・パンツ
- 19 Anyone Else But You エニワン・エルス・バット・ユー
／MICHAEL CERA AND ELLEN PAGE マイケル・セラ・アンド・エレン・ページ
:(ジュノとボーリーのヴァージョン) 《主演の二人が主題歌をカバー》



WPCR-12873 ¥2,580 (税込)

ワーナーミュージック・ジャパン

<http://wmg.jp/artist/juno/>



US盤CDジャケット



JUNO's Favorite

ジュノのお気に入り

text by 小西未来(「ギター」「ワイマラナー」のみ編集部)



Sunny D
(サニー・ディー)

子供に大人気のフルーツ味のジュース。一見、オレンジジュースのように見えるが、実は果汁は2%以下(そのかわり、ビタミンB1とCを配合している)。糖分を多く含んでいるため、児童の肥満の原因になっているとの指摘もある。種類はいくつもあり、常温で18日間持つという。



Slushee
(スラッシー・Slush)

氷とシロップをミキシングしたシャーベット状の飲み物。スムージーに近いが、乳製品やフルーツなどを一切含まないため、ヘルシーさは皆無と言える。ガソリンスタンドの売店やコンビニで購入することができる。



Guitar
(ギター)

ジュノが愛用しているギターはハーモニー社のもの(ハーモニー社は74年に製造をすべて終了)。ちなみにレッド・ツェッペリンのジミー・ペイジもハーモニーを使用していたらしい。また、マークが「趣味の部屋」で大事に保管しているのはギブソン社のレスポール。

Hamburger Phone

(ハンバーガー・フォン)



バーガー型の電話。80年代に人気があった電話機。脚本家のディアブロ・コディにとっては、高校時代、ボーイフレンドと長電話するときに使用していた思い出の品だという。

BREN's Favorite

ブレンのお気に入り

Weimaraner
ワイマラナー

ジュノの義母・ブレンのお気に入りには、犬全般だが、特に青みがかった毛色のワイマラナーがお気に入り。優雅な身のこなしと機敏な性格で鳥獣犬として活躍する一方、飼い主に忠実な性格なので家庭でも飼われている人気の犬種。



PAULIE's Favorite

ポーリーのお気に入り

tic tac
(ミント味のタブレット)

ポーリーのお気に入りには、イタリアのフェレロ社が世界展開するミントのタブレット菓子のオレンジ味。日本で人気のFRISKと似ており、アメリカではナンバーワンのシェアを誇る。オレンジ味は90年代に加わった新フレーバー。



『JUNO／ジュノ』台詞の面白さ

text by 小西未来

『カサブランカ』(42)の「君の瞳に乾杯!」から『タイタニック』(97)の「世界はおれのものだ!」に至るまで、名作映画には必ず名セリフがあるように、『JUNO／ジュノ』にも記憶に残るセリフがたっぷりと詰まっている。実際、脚本を執筆したディアブロ・コディがアカデミー賞を受賞したのも、彼女が生み出した数々の名セリフのおかげと言っても過言ではない。

しかし、アメリカ文化に関する知識が前提となった冷笑的ジョークが多いため、外国語に翻訳されると、どうしてもその魅力が半減してしまう(さらに字数の制限がある字幕作成はかなり大変な作業に!)。ここではいくつか代表的なセリフを取り上げて、その魅力に迫ってみたい。

Juno: Can't we just like kick this old school. You know, like I stick the baby in a basket, send it your way, like Moses and the reeds?

Mark: Technically, that would be kicking it Old Testament.

日本語字幕:

ジュノ「古い方法の縁組にして。赤ちゃんとカゴに入れて送る。モーゼみたいに」

マーク「旧約聖書か。かなり古い」

解説:

養子縁組について話し合っているとき、ジュノはオールド・スクール(伝統的)なやり方を提案する。するとマークが「それは、どちらかといえばオールド・テストメント(旧約聖書)だ」と言い返す。「赤ん坊をモーゼのようにかごに入れる」というのは旧約聖書からの出典であり、マークはジュノのユーモアを理解したうえで、突っ込みをいれたのだ。この短いやりとりを経て、ジュノはマークとは波長が合いそうだと察知する。

Juno: You should've gone to China, you know, 'cause I hear they give away babies like free iPods. You know, they pretty much just put them in those t-shirt guns and shoot them out at sporting events.

日本語字幕:

ジュノ「中国へ行けば? 無料iPodみたいに赤ん坊がもらえる。スポーツイベントでは客席に赤ん坊を投げ込む」

解説:

中国は人口過多だから、赤ん坊をiPodのように無料配布したり、Tシャツ銃(イベントでTシャツを配布するための空気銃)のなかに押し込んで発砲しているらしいじゃない、と軽口を叩いている。かなり過激な冗談だが、中国の一人っ子政策を理解しているばかりか、iPodやTシャツ銃といったポップカルチャーを引き合いに出して誇張している点はさすが。

Juno: Yeah, I'm a legend. You know, they call me the cautionary whale.

日本語字幕:

ジュノ「私は超有名。あだ名は“クジラ”」

解説:

cautionary whaleは、cautionary tale(訓話)とwhale(クジラ)とを掛け合わせたジュノの造語。お腹がクジラのように大きくなった自分は、他の女子高生にセックスの危険性を示す手本となっている、という意味。言葉遊びと自虐的なジョークはジュノの十八番である。

Juno: As far as boyfriends go, Paulie Bleeker is totally boss. He is the cheese to my macaroni.

日本語字幕:

ジュノ「ポーリーは文句なしに理想的カレシ。私にとって“マカロニのチーズ”」

解説:

ポーリー・ブリーカーとの相性がいかに素晴らしいか、茹でたマカロニにチェダーチーズを絡めたアメリカの家庭料理「マカロニ・アンド・チーズ」に喩えている。「わたしがマカロニだったら、彼こそがチーズ」と、ポーリーこそが自分を引き立てる存在である、と主張している点が可愛い。

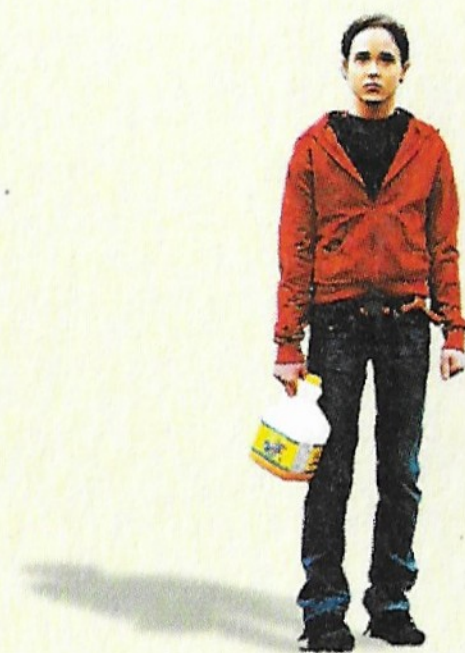
ジュノの嫌いな言葉 **Sexually Active**

「日常的にセックスをしている」という意味の婉曲表現で、医師や教師、両親が好んで使う“政治的に正しい”言葉。「性的に活発である」という意味。



JUNO

A comedy about growing up
...and the bumps along the way.



T4988104038128